

史標 66

O. D. A.「史標」出版局

2020年3月号

"SHIHYOU" 66

March 2020 (published 31st March 2020)

ISSN 1345-0522

Editorial board: Nanami KAWAI, Ayumi MORITA

Laboratory of Architectural History

School of Creative Science and Engineering, Waseda University

O. D. A. "SHIHYOU" publishing

Room 8F-10, Okubo 3-4-1, Shinjuku, Tokyo 169-8555

TEL: 03-5286-3275

FAX: 03-3204-5486

Mail Address: shihyo@lah-waseda.jp

目次

Contents

* * * * *

『井上一典遺稿』について	pp. 1-8
A Bibliographic Research Report of INOUE Kazusuke Manuscripts	小岩正樹研究室 修士 2 年 常琢

早稲田大学建築学教室所蔵	
"DAS REICHSTAGS-GEBÄUDE IN BERLIN VON PAUL WALLOT" の概要と資料価値の考察	pp. 9-16
Valuable archives outline and consideration of its value of	
“DAS REICHSTAGS - GEBÄUDE IN BERLIN VON PAUL WALLOT”	小岩正樹研究室 学部 4 年 河合七海

長野宇平治のフランスルネサンスに関する蔵書：	
『LA PEINTURE DÉCORATIVE EN FRANCE DU XVI AU XVIII SIÈCLE』について	pp. 17-22
A Bibliographic Research Report of “LA PEINTURE DÉCORATIVE”	小岩正樹研究室 修士 1 年 高瀬道乃

焼失文化財における『田辺泰』 ガラス乾板について	pp. 23-36
About "Yasushi Tanabe" Glass Plate in Burned Cultural Properties	小岩正樹研究室 学部 4 年 内田鞠乃

ミャンマー・バガン遺跡群の方位観（1）	pp. 37-48
The Orientation of a Citadel and its Architectures in Bagan, Myanmar (1)	早稲田大学 理工学術院総合研究所研究員 黒岩千尋

* * * * *

執筆者略歴、執筆後記	p.49
お知らせ	p.50

『井上一典遺稿』について

A Bibliographic Research Report of INOUE Kazusuke Manuscripts

小岩正樹研究室 修士課程2年 常塚

1. はじめに

2019年早稲田大学小岩研究室資料調査にて、角形3号封筒に包まれた3冊の中国建築に関する手書きの調査報告書が当大学建築学教室で見つかった。未公開文書である本資料の表書きに「井上一典」「陸軍少尉井上一典」と署名されていたため、この資料を『井上一典遺稿』（以下『遺稿』と略す）と名付けた。

『遺稿』には、明顕陵調査報告の文稿一冊・附録一冊、當陽玉泉寺文献研究一冊がある。各資料の表紙には、「明代陵墓「顕陵」に就いて」「顕陵」附録」「主トシテ文献ヨリ見タル當陽玉泉寺建築考」という表題が付いている。序文によって、井上は1941年3月より実測調査を中心に明顕陵の研究を行い、個人的関心から軍務の余暇に調査報告書を作成したことがわかった。

ほぼ同時期、中国建築に対する調査と研究は組織や機構によって行なわれていた。これらと異なる井上の調査研究は、日中戦争期における中国建築調査の特異な例として、貴重な歴史価値を持つ資料だと考えられる。

本稿では、初めて発表される新出資料とされる『井上一典遺稿』を紹介しながら、著作者や資料作成の背景、内容考察など、資料調査の成果を報告する。

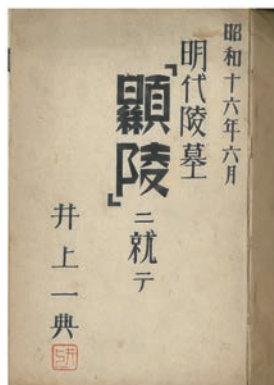
2. 書誌調査

2.1 書誌情報

『遺稿』の書誌情報は表1に示した通りである。

表1 『井上一典遺稿』書誌情報

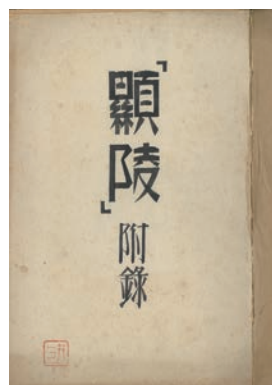
「井上一典遺稿」			
冊号	第1冊	第2冊	第3冊
内容	明顕陵研究	明顕陵研究付録	當陽玉泉寺研究
年代	昭和16年(1941)		
所蔵	早稲田大学建築学教室		
大小	180mm*257mm (B5判)		
ページ数	56	39	21
内容類別	文稿、地図、図表	実測図、写真	文稿、写真
綴じ方	袋綴・大和綴	大和綴	糸綴(簡単隅糸)



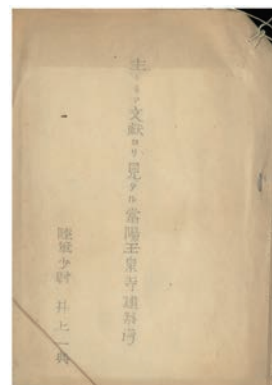
第1冊



第1冊(裏)



第2冊



第3冊

図1 「井上一典遺稿」の表紙

表 2 『井上一典遺稿』資料構成（筆者作成）

名称	内容		文稿ページ数	図版ページ数	書き方	用紙	大小（横×縦 mm）		
封筒	早稲田大学大学院工学研究科		—	—	印刷	クラフト紙 （茶封筒）	215 * 274（角 3 号）		
第一冊 明顕陵研究文 稿	表紙	昭和十六年六月 明代陵墓「顕陵」ニ就テ 井上一典		表紙 1	—	手書き （図版印刷）	板紙	180 * 257（B5 判）	
	目次	目次		2	—		文稿：原稿用紙 図版：白紙、茶紙、 方眼紙、白薄紙	180 * 257（B5 判） 図版折り込みサイズ	
	序	序		3	—				
	正文	第一章	顕陵ノ地理的考察	11（p.1-11）	4				
		第二章	顕陵造営ニ関スル史的考察	7（p.13-19）	—				
		第三章	造営概要	4（p.21-24）	1				
		第四章	陵墓遺構概要	16（p.25-40）	1				
	第五章	結語	5（p.41-44）	—					
	参考文献	参考文献		1（p.45）	—				
裏表紙	「呂第五五四 0 部隊」「内容検閲済」		裏表紙 1	—	印	板紙	180 * 257（B5 判）		
第二冊 明顕陵研究附 録	表紙	「顕陵」附録		表紙 1	—	手書き	板紙	180 * 257（B5 判）	
	附録第一	實測圖		中扉 1	16		白紙	180 * 257（B5 判） 図版折り込みサイズ	
	附録第二	遺構寫眞		中扉 1	19(74 枚)		写真紙、褐色粗紙	180 * 257（B5 判）	
	裏表紙	「呂第五五四 0 部隊」「内容検閲済」		裏表紙 1	—				印
第三冊 当陽玉泉寺文 献研究	複写版	表紙	「主トシテ文献ヨリ見たル當陽 玉泉寺建築考」		表紙 1	—	手書き 両面複 写	白紙	180 * 257（B5 判）
		序	序		1	—			
		正文	第一位置	1（p.1）	1（p.2）				
			第二營造年代	3（p.3-5）	—				
			第三伽藍配置	—	1（p.6）				
			第四現在伽藍ノ概要	5（p.7-11）	—				
			第五其他ノ遺物	2（p.11-12）	—				
			第六結語	1（p.13）	—				
	参考文献	参考文献		1（p.13）	—				
	鉛筆稿	文稿		4	1	手書き	陸軍原稿用紙		
		写真		—	2(5 枚)				

表 3 『井上一典遺稿』図面と写真リスト（筆者作成）

番号	図版名称	数	横×縦 mm	番号	図版名称	数	横×縦 mm	番号	図版名称	数	横×縦 mm
1-1	湖北省中部之圖（五十万 分一之尺）	1	960 387	2-21-4	臥象	1	57 42	2-30-4	明樓高台下廻リ裝飾	1	58 43
1-2	安陸附近之圖（五万分 一之尺）	1	470 735	2-22-1	立麒麟	1	57 42	2-30-5	明樓高台下廻リ隅部	1	58 43
1-3	鐘祥縣境總圖（鐘祥縣 志附録）	1	640 615	2-22-2	立馬	1	57 42	2-31-1	瑤台女牆	1	58 43
1-4	顯陵附近之圖（鐘祥縣 志附録）	1	290 405	2-22-3	武官	1	42 57	2-31-2	寶城圍牆女牆	1	57 42
1-5	顯陵營造年表	1	465 280	2-22-4	文官	1	42 57	2-31-3	瑤台外部	1	56 42
1-6	顯陵絵圖	1	375 265	2-23-1	文官	2	43 59	2-31-4	墳丘照壁	1	43 57
2-1	第一図顯陵全図	1	840 480	2-23-2	武官裝飾	1	43 58	2-32-1	瑤台ヨリ後寶城ヲ望ム	1	40 178
2-2	第二図紅門	1	360 255	2-23-3	武官	2	42 58	2-32-2	後寶城ノ磚瓦製斜路	1	42 58
2-3	第三図碑亭	1	360 257	2-24-1	陵恩門	2	58 43	2-32-3	後寶城斜路欄干	1	43 58
2-4	第四図華表柱	1	360 257	2-24-2	陵恩門袖壁裝飾	1	59 44	2-33-1	前寶城墳丘	1	56 41
2-5	第五図石像	1	362 257	2-24-3	陵恩門袖壁上部裝飾	1	43 57	2-33-2	後寶城墳丘及照壁	1	57 42
2-6	第六図石坊	1	360 257	2-24-4	全 下部裝飾	1	43 58	2-33-3	寶城圍牆龍頭	2	56 41
2-7	第七図二柱門・石橋	1	363 257	2-25-1	陵恩殿基壇ヲ通シ明樓 ヲ望ム	1	100 37	2-34-1	紅牆上部	1	58 44
2-8	第八図其ノ一陵恩門	1	365 257	2-25-2	陵恩殿高欄	1	59 44	2-34-2	紅牆	1	58 43
2-9	第八図其ノ二陵恩門袖 壁	1	363 257	2-25-3	全 礎石	1	43 59	2-34-3	寶城圍牆外部	1	58 42
2-10	第九図陵恩殿 陵寢門	1	363 257	2-25-4	全 基壇大龍頭	1	2 58	2-34-4	陵恩殿附近内陣壁上部	1	44 58
2-11	第十図陵恩殿前配殿（廂 舍）・陵恩殿基壇高欄	1	363 257	2-26-1	陵恩殿裏廻廊	1	58 43	2-35-1	唐草瓦（華頭版瓦）垂 板	1	89 63
2-12	第十一図其ノ一明樓	1	362 257	2-26-2	陵恩殿前配殿ノ礎石	1	59 45	2-35-2	巴瓦（華頭版瓦）円形 垂板	1	89 63
2-13	第十一図其ノ二明樓	1	360 257	2-26-3	陵恩殿斜石	1	45 60	3-1	[玉泉寺位置図]	1	180 257
2-14	第十二図寶城	1	360 257	2-27-1	陵寢門（磚造門）	1	57 43	3-2	玉泉寺伽藍配置略圖	1	180 257
2-15	第十三図瑤台	1	360 257	2-27-2	陵寢門ト陵恩殿トノ中 間ニ在ル台ノ高欄	1	58 43	3-3	伽藍配置略圖	1	180 257
2-16	第十四図瓦ノ寸法	1	360 257	2-27-3	陵寢門裝飾	1	43 58	3-4-1	[玉泉寺正殿]	1	42 58
2-17	顯陵全影（顯陵南方丘 陵端ヨリ望ム）	1	85 182	2-27-4	陵寢門	1	43 59	3-4-2	玉泉寺全影（鉄塔隅近 ヨリ望ム）	1	35 130
2-18-1	舊紅門	3	57 44	2-28-1	紀瑞文碑	1	43 58	3-5-1	[鉄塔全貌]	1	43 58
2-18-2	石橋	1	58 43	2-28-2	御賜祭文碑	1	42 57	3-5-2	[鉄塔基壇 1]	1	58 43
2-19-1	碑亭	2	57 42	2-28-3	御賜硃冊誌文碑亭	1	58 42	3-5-3	[鉄塔基壇 2]	1	58 43
2-19-2	碑亭拱門	1	42 57	2-28-4	明樓才二層	1	43 57				
2-19-3	石坊	2	57 42	2-28-5	聖號碑	1	43 58				
2-20	華表柱	3	100 68	2-29-1	須彌寶座（五供台）	2	57 43				
2-21-1	坐獅子	1	57 42	2-29-2	二柱門頭部	1	40 44				
2-21-2	坐獅豸	1	57 42	2-29-3	二柱門	1	42 58				
2-21-3	臥駝	1	57 42	2-29-4	須彌寶座隅部彫刻	1	44 60				
				2-30-1	墳丘圍牆ヨリ明樓ヲ望 ム	1	58 43				
				2-30-2	明樓正面	1	58 43				
				2-30-3	明樓高台拱門	1	44 59				

凡例：

a. 番号説明
2-19-2 _____ 図面番号
| _____ ページ順
1 — 第 1 冊文稿の貼り図
2 — 第 2 冊附録の実測図と写真
3 — 第 3 冊写真と図面

b. 網掛説明
網掛一図面
無地一写真

2.2 資料構成

第 1 冊と第 2 冊は明顕陵研究の研究文稿・附録であり、45 頁の研究手稿と合計 96 枚の図版(印刷図 6 枚、実測図 16 枚、実物写真 19 頁 74 枚)が確認された。本資料は、表 2 に示したように、序(研究目的と背景)、正文(地理考察・歴史考察・造営概要・遺構概要・まとめ)、参考文献によって構成されている。

第 3 冊は当陽玉泉寺文献研究として、前半部(複写版)と後半部(鉛筆原稿)に分けられる。前半部は序(研究目的と背景)、正文(位置・年代・伽藍配置・伽藍現状・他の遺物・まとめ)、参考文献によって構成されている。後半部は現地野帳として、原稿 13 頁と図版 8 枚が確認された。綴じ方、用紙、筆跡などから 3 冊資料を比較すると、第 3 冊は未完成だという特徴をもつ資料である。

2.3 トレース調査

①封筒文字

早稲田大学大学院工学研究科
東京都新宿区戸塚町一丁目六四七番地
電話東京(34)代表 2141・4141

『早稲田大学百年史』によれば、「早稲田大学大学院工学研究科」という名称は 1951 年から 1961 年まで使用されたことが明確化された。それから、この封筒は 1951 年以後、『遺稿』に包み込まれたと推測する。1967 年、早稲田大学建築学科の移転により、『遺稿』は現在の久保理工校区建築学教室に所蔵されたと考えられている。

②印影 第 1 冊、第 2 冊の裏表紙には、青色印影「呂第五五四〇部隊」赤色印影「内容検閲済」が残っている。この印影は「中支那作戦部隊呂集団」の検査印と推測する。

③陸軍原稿用紙

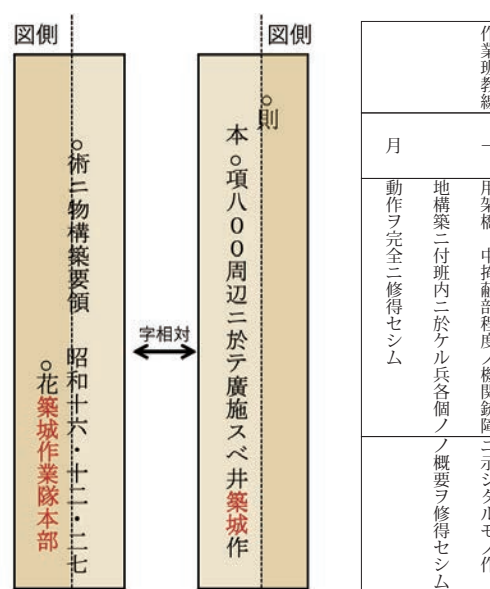
第 3 冊「当陽玉泉寺文献研究」において、後半部は陸軍原稿用紙に鉛筆で走り書きで書かれている。赤色の陸軍原稿用紙の下段には、「陸軍」「昭和十三・二・日本ノート納」「大綴・宮崎納」のような文字が付いている。

④築城に関する文字

図版 1-5、1-6、2-1 裏面の製本側の真ん中において、「銃眼ノ型式」の文字が付いている。銃眼は築城用語の一つである。

また、第 1 冊の図 1-1 製本側の貼り紙において、「本□項八〇〇周辺ニ於テ廣施スベ井築城作」「□術ニ物構築要領 □花築城作業隊本部 昭和十六・十二・二七」という文字(□は読解不可能な字)から陸軍少尉としての井上一典の姿が垣間見える。井上は築城作業部隊に従事していた可能性が高い。(図 2-1)

さらに、第 3 冊には古紙の再利用による残ったトレースが多い。タイトル小紙の裏面において、「作業班教線」「用架橋 中掩蔽部程度ノ機関銃障 地構築ニ付班内ニ於ケル兵各個ノ 動作ヲ完全ニ修得セシム」など築城作業部隊の日常記録が見られる。(図 2-2)



(左) 2-1 第 1 冊の図 1-1 製本側の小紙
(右) 2-2 第 3 冊タイトル小紙の裏面

図 2 築城に関する文字

3. 著作者井上一典の比定

著作者井上一典の記録は見られず、同時期に建築家井上一典が存在することから同一人物である可能性が指摘できる。

「井上一典」と呼ばれる人物は、近代建築史に残る有名な設計競技「広島平和記念カトリック聖堂建築競技」にて建築家丹下健三と並び 2 等入賞した建築家として有名である。建築家としての井上に関する先行研究は僅かに未出版の佐藤嘉明（2018）によるもののみであった。前述の先行研究と早稲田学報による学生記録を基づいて、建築家井上一典（1914-1966）の経歴を表 4 に示す。

表 4 建築家井上一典の経歴

時期	年代	出来事
①学生時期	-1937	早稲田大学理工学部建築学科を卒業、森永製菓会社工務課入社
②従軍時期	1938-1942	1938 年入営 近衛工兵聯隊第三中隊第五班 1939 年中国へ 中支派遣山田部隊氣付小池（愛）部隊本部見習士官 中国湖北地区トーチカ陣地構築に従事
	1943-1946	佐藤武夫研究室の助手として執筆した建築雑誌掲載論文が 5 点 太平洋戦争暴発 ラバウルへ
③従業時期	1946-1966	1946-1948 年佐藤総合建築事務所に勤務、1948 年「広島平和記念堂建築競技」で 2 等当選 1949-1958 年井上一典建築設計事務所（津久井町中野自宅） 1959-1966 年株式会社井上一典建築設計事務所（東京都新宿区柏木）

建築家井上と著作者井上の経歴を比較すると、以下の二つの根拠から、両者は同一人物である事が確認された。

①経歴面：1937-1942 年 建築家井上は 1938 に入営し、1939 年中国湖北地区へ派遣され、1942 年に日本に帰国した。著作者井上は 1939 年中国に渡り、二年間江北地区で従軍した。『遺稿』は井上氏が二度目に従軍した前、1942-1943 年佐藤武夫研究室の助手時代における遺留物であると推測する。

②実証面：「築城」の記録 前述したトレース調査により、著作者井上は築城作業を行ったことがある。また、建築家井上も中国湖北宜昌におけるトーチカ陣地構築に従事したことがある。井上自宅にその時授与された勲章が残されている。

4. 井上「明顕陵研究」の内容検証

4.0 明顕陵の概要

明顕陵は、中国湖北省鐘祥市において、明朝の第 12 代皇帝嘉靖帝（1522 年 - 1566 年）の父母合葬墓である。明正徳 14 年（1519 年）に創建され、嘉靖 38 年（1559 年）に完成、40 年かけて作られた。1985 年に全国重点文物に指定され、2000 年に明・清王朝の皇帝墓群計 25 座の一としてユネスコの世界文化遺産に登録された。

4.1 井上「明顕陵研究」の内容構成

内容構成は図 4 の通りに、序論・本論（地理的考察、造営的考察、遺構考察）・結論の三つの部分が構成される。

地理的考察（『遺稿』第 1 冊第 1 章）では、北東西の三面が閉ざされて南面が開いている地理

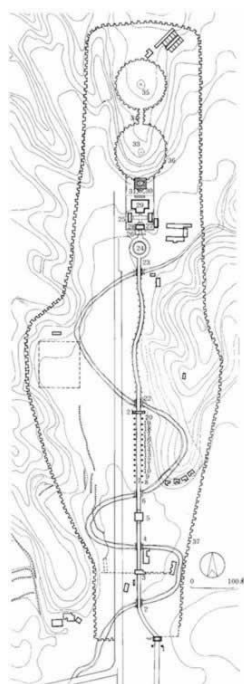


図3 明顕陵の平面図

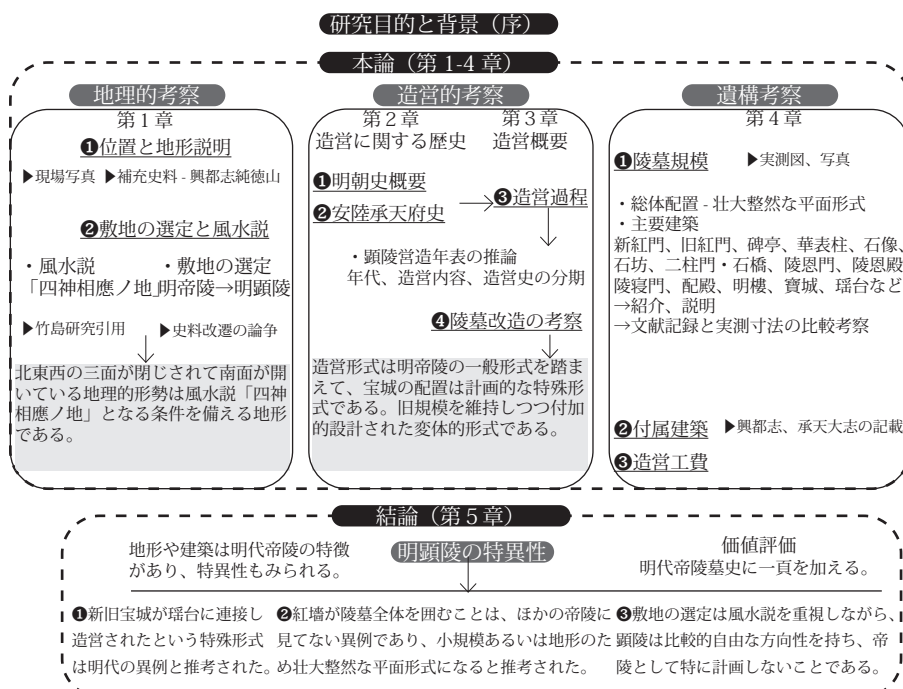


図4 井上「明顕陵研究」の内容構成

的形勢は風水説「四神相應ノ地」となる条件を備える地形であると指摘している。造営的考察（同冊第2, 3章）において、造営形式は明帝陵の一般形式を踏まえて、宝城の配置は計画的な特殊形式であり、旧規模を維持しつつ付加的設計された変体的な形式であると指摘される。遺構考察（同冊第4章）では、実測図や写真など現地調査と文献調査を通して、建築遺構を紹介し、文献記録と実測寸法を比較的に考察している。また、遺構がない付属建築と造営工費の文献記録が説明された。

結論（同冊第5章）において、明顕陵は新旧宝城の特殊形式であり、紅牆が陵墓全体を囲み、帝陵として特に計画しないという特異性があるという3点が指摘されている。

4.2 井上「明顕陵研究」の調査研究方法

井上の引用資料には「承天大志」（一部破損）、「興都志」、「鐘祥縣志」（民国二十六年版）、竹島卓一「風水説と支那歴代の帝王陵」、関野貞「支那の建築と芸術」がある。

井上の調査方法は、陸軍上等兵菅沼明と二人で築城部隊の測量道具を用い、現地で実測調査と写真撮影を行い、軍務の余暇時に内容を整理し、製本して完成した流れであると推測できる。

井上の研究は、文献研究・現地調査と実測・比較研究によって行われた。他の明帝陵との比較を通して、明顕陵の特異性が明瞭化された。

4.3 研究内容の検証

研究内容の検証は、①史料内容：書き写しの間違い、解説の妥当性、②実測図：描き方の正確性、寸法の誤差、③写真資料：位置と分布の分析、④研究内容：論点の妥当性などに関して展開している。

①検証結果1：引用資料（地図、史料、既往研究）

第1冊に使用された図版の出典を考察する。国立国会図書館に所蔵された軍用地図と比較して、図版1-1 湖北省中部之圖, 1-2 安陸附近之圖は軍用地図の可能性が高い。明、清、民国の総

計 5 版鐘祥縣志と比較して、図版 1-3 鐘祥縣境總圖、1-4 顯陵附近之圖は民国 26 年版と確認された。図版 1-5 營造年表は井上自絵の成果であり、図版 1-6 顯陵絵図は承天大志にある絵図を模写した青図であると推測する。

引用された史料の原文と対照すると、中国語文献の抄写による誤字や句読点のつけ間違いが発見された。

②検証結果 2：実測図と写真

検証項目は位置の確認、描法の特色、寸法の誤差に関してである。実測図において、誤差の発生は測量の精度と、1941-1997 年の間に行われた改造修理による可能性があった。1941 年の写真資料と遺跡現状の比較から、顯陵の変遷が確認される。井上の図版資料はインテグリティと全面性が評価され、これ以前の実測図と写真が発見されていないことから、『井上遺稿』は貴重な資料であると言える。

③検証結果 3：論点の考察

2011 年版明顯陵保護計画において、明顯陵は明帝陵との共通性が 7 点あり、独自性が 6 点あると指摘された。両者は明代帝陵との比較を通して論じていたが、井上は他の帝陵との相違性を強調し、保護計画は先代から継承した陵墓特徴が指摘された。そのうち、井上結論の特異性〔③自由な方向性〕について、現在に至る顯陵研究はみられなかった。

5. 井上の中国建築調査活動の考察

5.1 井上調査活動の背景と条件

社会背景、井上個人の背景、当時の建築史学界の三つの面から考察する。

①社会面：日中戦争期^{注 1)}

②個人面：教育背景と調査に携わった要素

井上は早稲田大学建築学科の学習を通して、製図や背景知識など調査研究の基礎技能を把握したことが判明した。1934-1937 年「早稲田建築学報」には、井上の洋風住宅（一年次）、店舗設計（二年次）、コンポジション・描法練習（三年次）、映画研究所（卒業計画）が掲載された。また、当時の早稲田大学建築学科は伊東忠太の「東洋建築史」や「建築測量」といった授業が開設された。

さらに、鐘祥県教科長楊雨廷の協力、築城作業部隊における陸軍少尉の身分などの条件も調査活動に役立った。『遺稿』第 1 冊序論において、「鐘祥縣教科長楊雨廷氏（明治四十一年早大卒）ヨリ此ガ「顯陵」ナル明代陵墓ノ遺構デアルコトヲ説明サレ且種々ノ關係文獻ヲモ提供サレタ」と記述された。井上が自述された経緯によると、1908 年清国留学生として早稲田大学を卒業した鐘祥県教科長楊雨廷（1878-1965 楊霽垣 字雨廷）の協力が大きく役に立ったということが分かった。彼が引用した鐘祥の地方誌—承天大志（明吾楚纂修）、興都志（明顧璘督修）、鐘祥縣志は楊雨廷からもらった史料であると考えられる。また、築城作業部隊に従事していた陸軍少尉は実測調査などが必要な道具・労働力を手に入れやすかったと推測する。

③当時の建築史学界

特に、関野貞と竹島卓一の中国陵墓調査を紹介する。1930 年、当時に東方文化学院に所属

した関野貞は一番目の研究テーマとして「支那歴代帝王陵」を研究していた。同年 5 月、助手竹島卓一と同行し中国へ陵墓調査を行なった。その後、研究成果として「支那歴代帝王陵」「風水説と支那歴代帝王陵」が順次に発表された。

関野貞と竹島卓一の陵墓研究には明顕陵が触れられていないが、井上氏「明顕陵研究」には二者の風水説の研究手法や明代帝王陵の資料が引用された。

5.2 井上の調査活動系と時間系

前述第 1 章の資料調査から、井上は 1939 年 -1941 年の間に中国湖北地区を広範囲に歩き廻り、築城作業部隊に従事したことが確認された。また、彼は 1940 年 5 月から 6 月まで宜昌作戦（中国側：棗宜会戦）トーチカ陣地構築に従事した。

宜昌作戦は「日本軍の第 11 軍が、中国軍第 5 戦区軍の撃破と宜昌の攻略を目的として実行した」とされる。裏表紙の印影「呂五五四〇部隊」を考えると、井上は呂集団 11 軍の歩兵築城作業部隊に所属した可能性が高い。

表 5 井上の時間系と活動系 1939.5-1941.5

時間	地域	軍隊活動	調査研究活動
1939 年	江 北 地 区	5 月中国に着	—
1940 年	「歩 兵 回 り」	5 月 -6 月宜昌作戦	—
		10 月末鐘祥安陸某部隊転属	—
1941 年		築城部隊	1 月新春細雨中當陽玉泉寺見学 (3 月以前鐘祥縣教科長楊雨廷と面会、関係文献の提供と推測) 3 月中旬より顕陵実測
		陸軍少尉	3 月 31 日安陸 (玉泉寺序より)
		病院 (推測)	5 月 17 日漢口 (顕陵序より)

5.3 日本の中国建築調査史に見る井上調査

徐蘇斌 (1999) が提唱した日本の中国建築調査活動の時期区分によれば、第 2 時期 (1920 年代後期 - 1945 年) は研究組織の創建と植民地建築の勃興を特徴として、1926 年東アジア考古学会、1929 年東方文化学院の創立をはじめ、政府の支持の下で調査と研究が行われていた。

戦争前期の調査活動を比較対象として、戦争後期における日本側・中国側・ヨーロッパから中国建築調査活動を中心に考察する。

①日本側：広域的調査より具体的建築調査へ

前期は中国東北の一連の調査 (関野貞の陵墓調査・遼金建築、村田治郎、東亜考古学会の渤海国遺跡考察など)、石窟調査 (水野清一) などが挙げられる。後期は東方文化学院京都研究所の雲岡石窟における大規模な実測、東亜考古学会の山西大同、河北趙王城、山東魯城調査などが挙げられる。

②中国側：広域的調査から局所的調査へ

前期には中国营造学社によって広域的調査が行われていた。日中戦争開始後、中原の調査は中断されたが、中国营造学社は西部に移転し、昆明とその付近地域 (1938.10.10-11.12)、雲南の西北部 (1938.11.24-1939.1.25)、川康地域 (1939.8.26-1940.2.16)、西南地域 (1940.7-1941.12) の調査が行われた。

この時期、戦争活動は建築調査に大きな影響を与えた。上記調査と異なる井上の中国建築調査は、参加人数、調査目的、調査研究方法、調査対象分布地域などの異質点が挙げられる。

6. おわりに

以上のことから、『井上一典遺稿』は建築家井上一典によって日中戦争期の 1941 年に完成さ

れており、二度の参戦の間 1942-1943 年に佐藤武夫研究室助手時期の遺留物として、1951-1961 年版工学院封筒に入り、1967 年に大久保理工校区へ移転した歴史経緯が明瞭した。

また、日中戦争期という特殊な歴史背景において、中国建築調査活動にも大きな影響を与えた。井上図版資料はインテグリティと全面性が評価され、これ以前の実測図と写真が発見されていないことから、井上遺稿は貴重な資料であると言える。

今後、遺稿内容と建築調査活動を中心に深く考察し、『井上一典遺稿』の価値を解明していきたい。

< 注釈 >

注 1…日中戦争期は日本側で盧溝橋事件(1937 年 7 月 7 日)から日本の降伏が国民に公表された日(1945 年 8 月 15 日)までの 15 年、中国側で満州事変の発端となった柳条湖事件(1931 年 9 月 18 日)から日本の降伏文書署名の日(1945 年 9 月 2 日)までの 8 年であるという主張の相違がある。本研究は井上側の視点から展開しているため、全面戦争になった盧溝橋事件から終戦日までの時期における中国建築調査活動を主に考察する。

本研究では、日本の戦争期を、①満州事変〔九一八事変〕から盧溝橋事件〔七七事変〕勃発前まで、②盧溝橋事件から終戦日までの二期に区分している。中国側の用語を〔 〕に示す。

①前期(1931 年後半 -1937 年前半):日本軍は中国東北の占領を経て、盧溝橋事件勃発前まで永定河以北の平津地区を制圧した。中国にて戦争の避難による大規模な人口流動が発生し、各機構は中国西部や西南へ移転していた。

②後期(1937 年後半 -1945 年前半):全面戦争に入り、華北、華東が相次いで陥落した。日本側にて戦争活動の進行とともに、中国東北や、交通拠点となる都市において破壊と建設活動が並行して行われた。

< 出典 >

表 1～5 筆者作成

図 1 筆者撮影 早稲田大学建築学教室所蔵

図 2, 4 筆者作成

図 3 世界遺産明顕陵ホームページ <http://www.zgmxl.com/index.asp>

< 参考文献 >

①早苗會時報 1938-1941 東京:早苗會

②早稲田建築学報 1922-1942 早稲田大学理工学部建築学教室

③防衛庁防衛研修所戦史室『支那事変陸軍作戦』朝雲新聞社 1975

④徐蘇斌『日本の中国都市と建築の研究』中国水利水電出版社 1999

⑤徐蘇斌『中国の都市・建築と日本:「主体的受容」の近代史』東京大学出版会 2009.9

⑥中国抗日戦争史編写組『中国抗日戦争史』人民出版社 2011.9

⑦高木理久夫、森美由紀「早稲田の清国留学生—『早稲田大学中国留学生同窓録』の記録から—」『早稲田大学図書館紀要』第 62 号 2015. 3

⑧佐藤嘉明『私家版 建築家井上一典覚書』相模原市立公文書館所蔵 2018

早稲田大学建築学教室所蔵 "DAS REICHSTAGS-GEBÄUDE IN BERLIN VON PAUL WALLOT" の概要と資料価値の考察

Valuable archives outline and consideration of its value of
"DAS REICHSTAGS - GEBÄUDE IN BERLIN VON PAUL WALLOT"

小岩正樹研究室 学部4年 河合七海

1. はじめに

本稿は、資料調査の一貫として行った早稲田大学建築学教室に所蔵されていた Cosmos 社 1912 年出版の図書 "DAS REICHSTAGS-GEBÄUDE IN BERLIN VON PAUL WALLOT" の記載概要の把握と資料価値の考察を目的として論じる。

本資料は、Reimund giesecke 監修の元に発行された Paul Wallot(1841-1912) 設計の旧国会議事堂の解説及び図版、図面が掲載された書物である。なお、本稿において、調査資料の記載内容である Paul Wallot 設計の国会議事堂を旧国会議事堂と呼称し、Norman Foster(1935-) 設計のものを現国会議事堂と呼称することとする。

前述したように、旧国会議事堂はドイツの建築家・Paul Wallot によって設計され、1884 年から 1894 年にかけて建設されたものである (図 1)。ドーム屋根と隅の 4 つの塔が特徴的であり、当時では卓越した技術とされている¹。旧国会議事堂の本会議場は 1933 年 2 月 27 日から 28 日にかけての夜中に、無政府主義者と共産主義者と思われる者によって放火され、破壊された。さらに第二次世界大戦では 1945 年にベルリン攻防戦によって全体的に破壊された (図 2)。そして、1964 年から 1973 年まで、Paul Baumgarten(1900-1984) の設計で内部が利用できるように部分修復が行われた。さらに 1991 年、Norman Foster が設計を担当し、改築が行われた。現国会議事堂は 1999 年に完成し、現在に至る。現国会議事堂の象徴とも言えるガラス張りのドーム天井は、旧国会議事堂の象徴を残したものである (図 3)。



図 1 Paul Wallot 設計の国会議事堂



図 2 戦後の国会議事堂



図 3 Norman Foster 設計のドーム屋根

現国会議事堂の象徴とも言える正面のドーム型屋根だが、Paul Wallot 設計当時はこのドームを巡った問題があった。当時の皇帝 Wilhelm II 世は議会を嫌い、Wallot の設計したドームの高さは 75-85m であり、これは皇帝の宮殿 (Berliner stadtschloss) のドームの 67m よりも高くなってしまうということと、ドームを真ん中にすることによって議会在象徴的なものになってしまうということに対して、皇帝の権威が薄れる、と Paul Wallot の設計に対して非難した。

この時代は歴史主義建築の時代であり、Paul Wallot も過去の建築を復古的に設計に用いた。旧国会議事堂はイタリアの新ルネサンス様式とドイツのルネサンス様式、さらに新バロック様

式の要素をミックスさせた様式であり、さらに当時の最新式の鋼鉄とガラスをドームに用いるという、様々な様式が混合した形で設計されている。このような様式が混合した旧国会議事堂は他の建築家から批判されている。このことから、旧国会議事堂設計当時のドイツは、これまでの様式の弱体化と次の時代に向けた様式の探求が行われていた時代であると考えられる。

これほどのドイツの国家建築に関与したにも関わらず Paul Wallot や旧国会議事堂に関する既往研究は少なくとも日本には存在しない。このことから旧国会議事堂に関する最初の資料と考えられる本資料自体を調査することに意義があると考えられ、本稿ではその記載内容を明らかにすると共に資料価値を考察する。

2. 資料概要

第 0 巻を加えた全 10 巻からなり、第 V 巻と第 VI 巻、第 VII 巻と第 VIII 巻はそれぞれ 1 冊にまとめられている。また、すべて同じデザインの表紙でライオンが描かれている (図 4)。0 巻は解説書であり、

Vorwort(まえがき)、*Vorgeschichte*(前史)、

Stellung des Reichstagshauses in seiner nächsten Umgebung(周辺について)、

Plananordnung des Hauses(建物の設計プラン)、

Inneres des Gebäudes(建物の内部)、*Südhalle*(南側大広間)、*Nord-Eingangshalle*(北側玄関ホール)、*Ost-Vorhalle*(東側ロビー)、*West-Vorhalle*(西側ロビー)、*Wandelhalle*(遊歩

空間)、*Verkehrsräume*(動線空間)、*Treppenhäuser*(階段の吹き抜け)、*Lese- und Schreibsäle*(書斎空間)、*Erfrischungsräume*(食堂)、*Großer Sitzungssaal*(大会議室)、*Sitzungssaal des Bundesrats*(連邦参議院の会議室)、*Nebensäle des Bundesrats*(連邦参議院隣接の空間)、*Bücherei Lesezimmer*(読書室)、*Bücherspeicher*(書庫)、*Küchenanlage*(調理設備)、*Äußeres des Gebäude*(その他)、*Konstruktive Einzelheiten*(構造的な細部)、*Heizungs und Luftungsanlage*(暖房と空調設備)、*Abmessungen des Gebäude und Baukosten*(建物の寸法と建築費用)、*Schlusssteinlegung*(終わりに)、*Nachwort*(あとがき)

が記載されている。

第 0 巻の *Plananordnung des Hauses* の項までは Paul Wallot 直筆と思われるサインの入った図面や透視図、外観図などの図版を交えながら解説され、それ以降の項目は文章のみで解説されている。まえがきは Paul Wallot による言葉が載せられ、記載から 1897 年に書かれたものであると分かる。まえがきの次のページには Paul Wallot の肖像画が載せられている (図 5)。

最後には当時の皇帝である Wilhelm II 世による 1894 年時の言葉も記載されている。NACHWORT(あとがき)は執筆者の記載がないことから本資料の作成者によるものと考えられる。出版年についても記載されていないが、あとがきの中で、

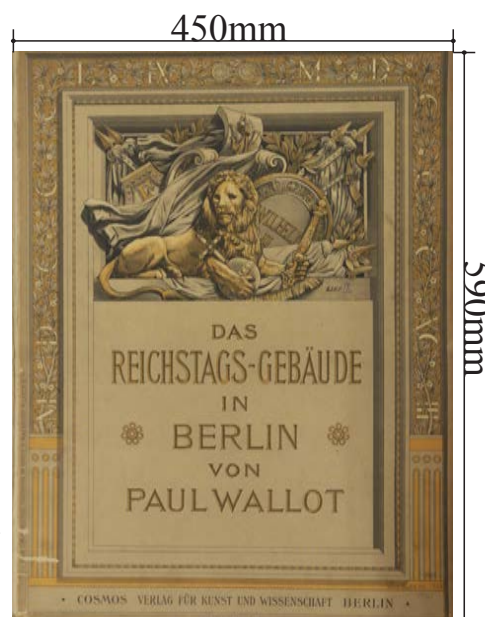


図 4 表紙

“Wenige Monate vor der Fertigstellung dieser Veröffentlichung
ist PAUL WALLOT, der Schöpfer des Reichstagsgebäudes,
aus dem Leben geschieden“²

(この出版物が完成する数ヶ月前に、国会議事堂の設計者である Paul-
Wallot は亡くなった (筆者訳))

という記述があり、彼が亡くなったのは 1912 年 8 月であるため、本資料
の出版年は 1912 年であると考えられる。



Paul Wallot
図 5 本資料に掲載された
Paul Wallot の肖像画

第 I 巻の冒頭に第 0 巻と同じまえがきが掲載され、それ以降は第 X 巻まで図版のみが記載
されている。第 0 巻にて空間が文章によって解説され、第 I 巻から第 X 巻にてそれらが総計
53 の図版で紹介されている。写真は片面 1 ページにつき 1 つの要素を、図面は見開き 1 ペー
ジで掲載する形式を基本とする。厚紙に印刷され、1 ページずつ薄い紙が挟まれている。表現
方法としては、建物の白黒写真をメインに、デッサン、図面 (図 6)、絵画 (ステンドグラス (着
色方法不明)) 図 7)、彫刻の詳細写真 (図 8) などが使われている。設備図は、循環経路が用途
ごとに色分けして表現されている (図 9)。書誌情報を次頁表 1 に、それを元に項目ごとに編
集し直したものを表 2 に示す。

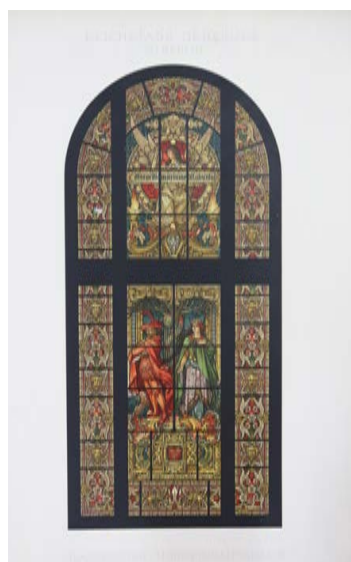


図 7 ステンドグラス

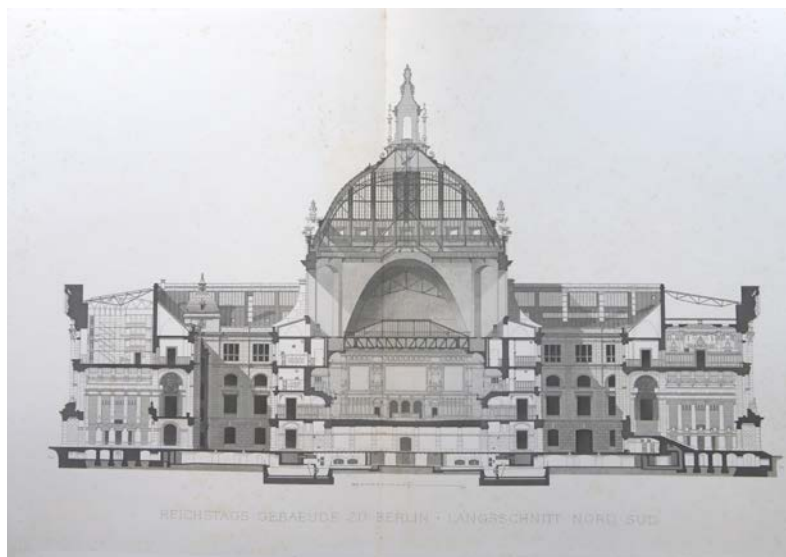


図 6 南北断面図



図 8 彫刻の詳細写真

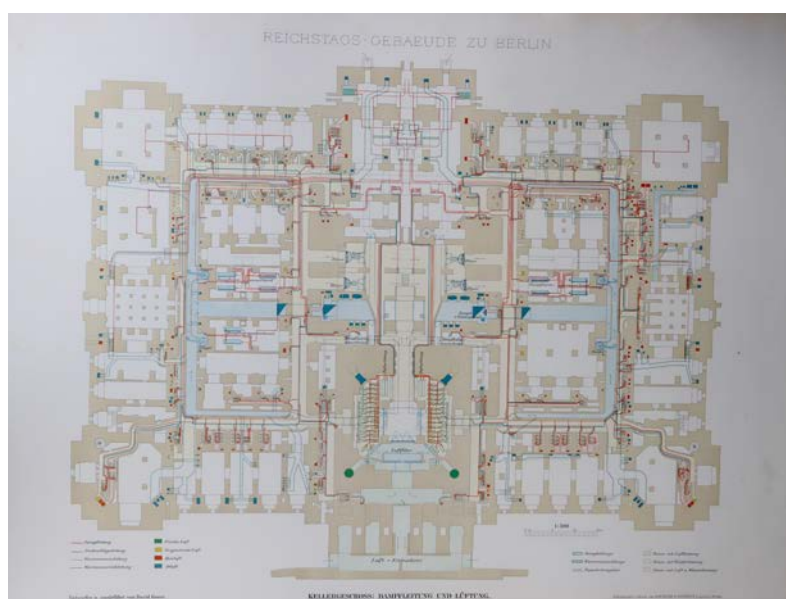


図 9 設備図

表 1 "DAS REICHSTAGS-GEBÄUDE IN BERLIN VON PAUL WALLOT" の書誌情報

DAS REICHSTAGS-GEBÄUDE IN BERLIN VON PAUL WALLOT					
巻	0	I	II	III	IV
内容	解説	図版			
出版年	1912年(推測)				
所蔵	早稲田大学建築学教室				
大きさ	450mm×590mm(ヨコ×タテ)				
ページ数	43	6	5	5	5
通しページ番号	—	1～6	7～11	12～16	17～21
内容詳細 (ドイツ語 /日本語(筆者訳))	Vorwort(前書き) Vorgeschichte(前史) Stellung des Reichstageshauses in seiner nächsten Umgebung(周辺について) Plananordnung des Hauses(建物の設計プラン) Inneres des Gebäudes(建物の内部) Südhalle(南側大広間) Nord-Eingangshalle(北側玄関ホール) Ost-Vorhalle(東側ロビー) West-Vorhalle(西側ロビー) Wandelhalle(遊歩空間) Verkehrsräume(動線空間) Treppenhäuser(階段の吹き抜け) Lese- und Schreibsäle(書斎空間) Erfrischungsräume(食堂) Großer Sitzungssaal(大会議室) Sitzungssaal des Bundesrats(連邦参議院の会議室) Nebensäle des Bundesrats(連邦参議院隣接の空間) Bücherei Lesezimmer(読書室) Bücherspeicher(書庫) Küchenanlage(調理設備) Äußeres des Gebäudes(その他) Konstruktive Einzelheiten(構造的な細部) Heizungs und Lüftungsanlage(暖房と空調設備) Abmessungen des Gebäude und Baukosten(建物の寸法と建築費用) Schlussteinlegung(終わりに) Nachwort(あとがき)	・ANSICHT VON SÜDOST / 東西の見え方 ・OST-EINGANGSHALLE / 西側玄関ホール ・SÜD-VORHALLE_EINGANG ZUR WANDELHALLE / 南側ホール、大広間への入り口 ・SCHMALWAND IM VORSALL DES BUNDESRATS / 連邦参議院の前の広間にある細い壁(柱) ・GRUNDRISS DES HAUPTGESCHOSSES / 主要階の平面図	・SITZUNGSSAAL_ ABSTIMMUNGSTHÜR / 会議室_採決の扉 ・EINZELHEITEN / 詳細 ・VON DER WESTFRONT / 西側玄関から ・OST-EINGANGSHALLE 東側玄関ホール ・GRUNDRISS DES ZWISCHENGESCHOSSES / 2階平面図	・GLASFENSRRER_SÜDSEITE / ステンドグラス_南側 ・ERFRISCHUNGSRaum / 食堂 ・RINGKRONE_WADELHALLE / 王冠(の形をしたシャンデリア) _遊歩空間 ・OBERLICHT ÜBER DEM SITZUNGSRAUM / 会議室上空からの上空写真 ・WESTFRONT / 西側立面図(1/200)	・BÜCHEREI_LESESAAL / 本_読書室 ・THÜRUMRAHMUNG_ ERFRISCHUNGSSAAL / _食堂 ・BÜCHERSPEICHER / 書庫 ・NEBENRaUM DER SÜD- EINGANGSHALLE / 南側玄関ホールの隣接空間 ・GRUNDRISS DES OBERGESCHOSSES / 上階平面図
表現方法	白黒写真、デッサン、図面、絵画(ステンドガラス(着色方法不明))、彫刻の詳細写真				
用紙	厚紙、薄紙				
保存状態	劣化、黄ばみ、背表紙の破損、染み、第Ⅱ巻p10欠落				

DAS REICHSTAGS-GEBÄUDE IN BERLIN VON PAUL WALLOT				
巻	V, VI	VII, VIII	IX	X
内容	図版			
出版年	1912年(推測)			
所蔵	早稲田大学建築学教室			
大きさ	450mm×590mm(ヨコ×タテ)			
ページ数	10	11	6	5
通しページ番号	22～26, 27～31	32～37, 38～43	44～49	50～54
内容詳細 (ドイツ語 /日本語(筆者訳))	・GEWÖLBE ÜBER DER SÜD- EINGANGSSAAL / 南側玄関ホールのヴォールト ・GROSSER SITZUNGSSALL / 大会議室 ・GROSSER SITZUNGSSALL_EKE / 大会議室_隅 ・GROSSER SITZUNGSSALL_GALERIE / 大会議室_ギャラリー ・GRUNDRISS DES ERDGESCHOSSES / 地上階平面図 ・LÄNGSSCHNITT NORD-SÜD / 南-北断面図(1/200) ・KELLERGEOSCHOSS_DAMPFLEITUNG UND LÜFTUNG / 地下階_蒸気管、換気 図面 1/300 ・KELLERGEOSCHOSS_NIEDERSCHLAGS- UND WARMWASSER-RÜCKLEITUNG / 地下階_雨水配管、温水を戻す管 1/300 ・MITTELTEIL DES KELLERS IN DER HAUPTQUERACHES VON WEST NACH OST / 地下下の中心部分の(設備室)の中の西から 東まで ・SITZUNGSSAAL_HEIZUNGS-UND LÜ FTUNGSANLAGEN / 会議室_暖房と空気循環装置	・GLASFENSRRER_NORD- EINGANGSHAAL / ステンドグラス_北側玄関ホール ・LESESAAL / 読書室 ・WANDELHALLE / 遊歩空間 ・SÜDVORHALLE.EINGANG ZUM BUNDESRATS-VORSAAL / 南側ホール_連邦参議院会議場への入り口 ・ERFRISCHUNGSRaum / 食堂 ・AUFBAU ÜBER DER OSTSEITE / 東側の上部構造 ・WÄCHTER ÜBER DER OSTSEITE / 東側の守護者 ・SÜDEINGANG / 南側入り口 ・NÖRDLICHER HOF / 北側中庭 ・NORD.EINGANGSHALLE / 北側_玄関ホール ・HAUPTGESCHOSS.HEIZUNGS-UND LÜ FTUNGSANLAGEN / 主要階_暖房、換気設備 ・SCHEMATISCHE DARSTELLUNG DER GRUPPEN I UND II DER DAMPF- WARMWASSWEHEIZUNG / I、II グループの蒸気温水暖房機管の図式描写	・GLASFENSRRER_NORD- EINGANGSHAAL / ステンドグラス_北側玄関ホール ・MITTELBAU_OSTFASSADE / 中央の建築_東側正面 ・NORDWESTLICHER ECKTURM / 北西の塔 ・BISMARCK ALS RITTER ST.GEORG.HAUPT.EINGANG.WESTS EITE; REICHSWAPPEN.DURCHFABRT- OSTSEITE / RITTER ST.GEORGとしての BISMARCK_西側の中央入り口; 勲章_東 側通路 ・SÜD-EINGANGSHALLE / 南側玄関ホール ・DACHGESCHOSS_HEIZUNGS-UND LÜFTUNGSANLAGEN / 屋上階_暖房、換気設備	・BUNDESRATS- SITZUNGSSAAL.WESTWAND / 連邦参議院の会議室_西側の壁 ・BUNDESRATS- SITZUNGSSAAL.NORDWAND / 連邦参議院の会議室_北側の壁 ・BUNDESRATS-SITZUNGSSAAL_ DECKENGEMÄLDE / 連邦参議院会議室_天井の絵 ・WESTSEITE_WAPPENBÄUME DER DEUTSCHEN BUNDESSTAATEN / 西側_ドイツ連邦国家の勲章の木 ・VOLLANSICHT DES REICHSTAGSGEBÄUDES / 連邦議会議事堂の全体像
表現方法	白黒写真、デッサン、図面、絵画(ステンドガラス(着色方法不明))、彫刻の詳細写真			
用紙	厚紙、薄紙			
保存状態	劣化、黄ばみ、背表紙の破損、染み			

表 2 "DAS REICHSTAGS-GEBÄUDE IN BERLIN VON PAUL WALLOT" の項目別書誌情報

内容	図版名(ドイツ語/日本語(筆者訳))	巻数	掲載ページ数	備考
スタンドグラス	GLASFENSERER__SÜDSEITE/スタンドグラス__南側	III	12	色彩画
	GLASFENSERER__NORD-EINGANGSHAAL/スタンドグラス__北側玄関ホール	VII	32	色彩画
	GLASFENSERER__NORD-EINGANGSHAAL/スタンドグラス__北側玄関ホール	IX	44	色彩画
玄関ホール	OST-EINGANGSHALLE/西側玄関ホール	I	2	
	OST-EINGANGSHALLE/東側玄関ホール	II	10	ページ欠如
	NEBENRAUM DER SÜD-EINGANGSHALLE/南側玄関ホールの隣接空間	IV	20	ホールから階段を見ている
	GEWÖLBE ÜBER DER SÜD-EINGANGSSAAL/南側玄関ホールのヴォールト	V	22	天井のランプ・彫刻メイン
	NORD-EINGANGSHALLE/北側__玄関ホール	VIII	41	
	SÜD-EINGANGSHALLE/南側玄関ホール	IX	48	
連邦参議院の会議室	BUNDESRATS-SITZUNGSSAAL__WESTWAND/連邦参議院の会議室__西側の壁	X	50	
	BUNDESRATS-SITZUNGSSAAL__NORDWAND/連邦参議院の会議室__北側の壁	X	51	
	BUNDESRATS-SITZUNGSSAAL__DECKENGEMÄLDE/連邦参議院会議室__天井の絵	X	52	天井の絵のみ切り取られている
大会議室	GROSSER SITZUNGSSAAL/大会議室	V	23	
	GROSSER SITZUNGSSAAL__ECKE/大会議室__隅	V	24	
	GROSSER SITZUNGSSAAL__GALERIE/大会議室__ギャラリー	V	25	
本読保	BÜCHEREI__LESESAAL/本__読書室	IV	17	
	BÜCHERSPEICHER/書庫	IV	19	
	LESESAAL/読書室	VII	33	
食堂	ERFRISCHUNGSRaum/食堂	III	13	
	THÜRUMRAHMUNG__ERFRISCHUNGSSAAL/ドア__食堂	IV	18	食堂入り口のドアの前から
	ERFRISCHUNGSRaum/食堂	VII	36	
遊歩空間	RINGKRONE__WANDELHALLE/王冠(の形をしたシャンデリア)__遊歩空間	III	14	シャンデリアメイン
	WANDELHALLE/遊歩空間	VII	34	
外観	ANSICHT VON SÜDOST/ 東西の見え方	I	1	
	VON DER WESTFRONT/西側玄関から	II	9	柱メイン
	OBERLICHT ÜBER DEM SITZUNGSRaum/会議室上空からの上空写真	III	15	
	AUFBAU ÜBER DER OSTSEITE/東側の上部構造	VII	37	
	SÜDEINGANG/南側入り口	VII	39	扉と彫刻がメイン
	NÖRDLICHER HOF/北側 中庭	VII	40	
	MITTELBAU__OSTFASADE/中央の建築__東側正面	IX	45	
オブジェクト (扉など)	NORDWESTLICHER ECKTURM/北西の塔	IX	46	
	SÜD-VORHALLE__EINGANG ZUR WANDELHALLE/南側ホール、大広間への入り口	I	3	扉と彫刻がメイン
	SCHMALWAND IM VORSALL DES BUNDESRATS/連邦参議院の前の広間にある細い壁(柱)	I	4	柱の彫刻メイン
	SITZUNGSSAAL__ABSTIMMUNGSTHÜR/会議室__採決の扉	II	7	カラー印刷、木製の扉、その中央に絵画
	SÜDVORHALLE,EINGANG ZUM BUNDESRATSVORSAAL/南側ホール__連邦参議院会議場への入り口	VII	35	扉メイン
彫刻	BISMARCK ALS RITTER ST. GEORG,HAUPTINGANG, WESTSEITE; REICHSWAPPEN,DURCHFABRT-OSTSEITE /RITTER ST. GEORGとしてのBISMARCK,西側の中央入り口;勲章,東側通路	IX	47	2枚の写真、1枚が入り口扉でも1枚が勲章の彫刻
	EINZELHEITEN/詳細	II	8	彫刻の詳細写真 5つのパーツに写真が切り抜かれている 東玄関ホールの彫刻が2枚、食堂の彫刻が3枚
	WÄCHTER ÜBER DER OSTSEITE/東側の守護者	VII	38	
平面図	WESTSEITE__WAPPENBÄUME DER DEUTSCHEN BUNDESSTAATEN /西側__ドイツ連邦国家の勲章の木	X	53	見開き1ページ縦使い、2枚の写真
	GRUNDRISS DES HAUPTGESCHOSSES/主要階の平面図	I	6	
	GRUNDRISS DES ZWISCHENGESCHOSSES/2階平面図	II	11	
	GRUNDRISS DES OBERGESCHOSSES/上階平面図	III	21	
立面図	WESTFRONT/西側立面図(1/200)	III	16	
断面図	LÄNGSSCHNITT NORD-SÜD/南-北断面図(1/200)	VI	27	
設備図	KELLERGECHOSS__DAMPFLEITUNG UND LÜFTUNG/地下階__蒸気管、換気 図面 1/300	VI	28	
	KELLERGECHOSS__NIEDERSCHLAGS-UND WARMWASSER-RÜCKLEITUNG /地下階__雨水配管、温水を戻す管 1/300	VI	29	
	MITTELTEIL DES KELLERS IN DER HAUPTQUERACHES VON WEST NACH OST /地下の中心部分の西から東まで	VI	30	平面図と断面図
	SITZUNGSSAAL__HEIZUNGS-UND LÜFTUNGSANLAGEN/会議室__暖房と空気循環装置	VI	31	断面図
	HAUPTGESCHOSS,HEIZUNGS,UND LÜFTUNGSANLAGEN/主要階__暖房、換気設備	VII	42	
	SCHEMATISCHE DARSTELLUNG DER GRUPPEN I UND II DER DAMPF-WARMWASSERHEIZUNG / I、II グループの蒸気温水暖房機管の図式描写	VII	43	
その他	DACHGESCHOSS__HEIZUNGS-UND LÜFTUNGSANLAGEN/屋上階__暖房、換気設備	IX	49	
	SCHMALWAND IM VORSALL DES BUNDESRATS/連邦参議院の前の広間にある細い壁(柱)	I	5	1889年に描かれたと思われるデッサン 一部色付けされている

3. Paul Wallot について

Paul Wallot の年表概略は以下の通りである。

1841 年 6 月 26 日ドイツ・オッペンハイムで生まれる。

1856 年～ 1859 年 ダルムシュタット工科大学に通う

1867 年～ 1868 年 イタリアとイギリスで大規模調査を行う。

1872 年 2 度目のイタリア調査を行う。

1880 年 フランクフルト中央駅や、1883 年ニーダーヴァルト

記念碑など様々な建築コンペに出品するものの敗北に終わる。

1882 年 旧国会議事堂の 2 回目の建築コンペで約 200 人の応募者の中から優勝。

同時期、1911 年まで Dresdner Kunstakademie (ドレスデン芸術大学) と

Technischen Hochschule Dresden (ドレスデン技術高校) で教授を務める。

1912 年 Langenschwalbach で亡くなる。

また、1991 年から 2001 年まで、ドイツの切手の肖像画となっていた (図 10)。1991 年に Norman foster による改築が始まったことに際して旧国会議事堂の設計者を選んだと考えられる。



図 10 Paul Wallot が描かれた切手

4. 再編集出版について

1987 年には、G.Westermann によって同じ出版社である Cosmos 社から再編出版されている。

調査対象資料は縦 590mm 横 450mm の大型資料であるが、再編出版されたこの資料は縦 360mm と縮小されている。

表紙はこれまでのライオンのデザインではなく、本資料第Ⅲ巻、16 ページ目の立面図 (WEST FRONT) のデザインになり (図 11)、表紙を開けると再編出版時のドイツ連邦議会議長、Philipp Jenninger のコメン

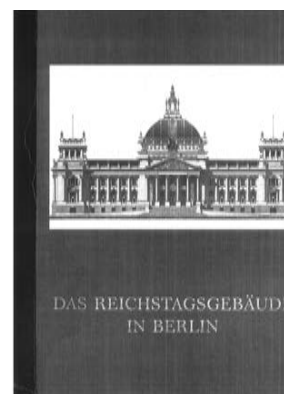


図 11 表紙

メントが記載されている。その次の頁に調査資料のライオンのデザインの中表紙があり、Paul Wallot の前書きから始まり、本資料と全く同じ内容が同じ順序で 1 冊の本にまとめられている。つまり、内容で異なるのは冒頭の議長からのメッセージのみである。議長からのメッセージには、冒頭に「Paul Wallot による建築物は帝国時代の最も重要な証の一つであり、同時に近代のドイツ史とベルリンの都市史の最も重要な記念碑でもある」と記され、続いて連邦議会について、「ドイツ連邦議会は統一と自由を待ち望んでいる象徴でもある」と述べ、国会議事堂について「国会議事堂はドイツ人皆のものであり、国の共有された遺産・希望の一部である」と述べている。そして最後は以下のように綴っている。

"Diese Faksimile-Ausgabe mit den Ansichten des Gebäudes in seiner ursprünglichen Gestalt erinnert an seine Entstehungsgeschichte und gibt einen Einblick in die Vorstellungen und Überlegungen, die den Architekten dieses Bauwerks geleitet haben. Der Deutsche Bundestag widmet diese Ausgabe den Bürgerinnen und Bürgern zum 750jährigen Jubiläum Berlins in

der Hoffnung auf eine glückliche Zukunft für Stadt, Staat und Nation."³

(元の姿の建物の写真を含むこの複製は、その発生の歴史を思い起こさせ、その建築家が導いた発想と考えるの洞察を与えてくれます。ドイツ連邦議事会は、ベルリンの 750 周年にあたり、街・州・国の幸福な未来を願ってこの出版物を全国民に捧げます。(筆者訳))

このことから、この再編集出版はベルリンの 750 周年という節目のために出版されたということがわかる。また、出版された 1987 年はベルリンの壁が崩壊する 2 年前であり、東西統一への願望や意向が含まれていた可能性も考えられる。さらにはこの出版から 4 年後の 1991 年に Norman Foster による改築が行われていることから、改築の兆しがあったことや、改築前に再び過去の記録を残しておこうとする意向もあった可能性が考えられる。

5. おわりに

調査資料の "DAS REICHSTAGSGEBÄUDE IN BERLIN VON PAUL WALLOT" は Paul Wallot 設計によるベルリン旧国会議事堂が細部まで鮮明な写真と図面と解説で記録されている。そして、それが Norman Foster 設計による現国会議事堂の基盤となり、それは Paul Wallot 設計の伝統と現代を融合したものになっている。また、Paul Wallot が設計で取り入れたドーム屋根は当時では卓越したものであり、ドイツの建築に新しい技術を取り入れるきっかけとなったと考えられる。

再編出版し、再び世に出そうという動きからは一定の価値があることが言えるが、再編出版物が国内大学図書館、国会図書館で所蔵の確認ができたのは福岡大学図書館のみであった。本調査資料である初版本は早稲田大学建築学教室でしか確認ができていないため、日本では唯一の所有の可能性が考えられる。

旧国会議事堂設計当時のヨーロッパは歴史主義建築の時代であったと先述したが、その後、モダニズムの波が押し寄せ、歴史主義建築は衰弱していく。ヨーロッパで歴史主義建築の波が引いた頃に日本は西洋の技術を取り入れようと、お雇い外国人を通じてそれが入ってくる。そして日本はイギリスとドイツ建築の系譜が流入した。実際、日本の国会議事堂の試案にはドイツ人建築家のエンデとベックマンの 2 人が携わっている。1918 年に行われた日本の国会議事堂の公開設計競技では図 12、図 13 のようにベルリン国会議事堂を想わせるような正面にドーム、隅に塔を持つ案がいくつも見られる。このことから Paul Wallot の設計した建築が日本の当時の建築に直接的ではなくとも少なからず影響していた可能性が考えられる。

以上のことから、当時のドイツの歴史主義がはっきりと見られる建築が細部まで掲載された本資料は貴重資料であると言える。



図 12 1918 年第 1 次公開設計競技当選案、立面図、断面図



図 13 1918 年第 2 次公開設計競技案第 2 等、吉木久吉設計の透視図

< 注釈 >

注 1…Deutscher Bundestag(<https://www.bundestag.de/besuche/architektur/reichstag/geschichte/verlauf-246958>) 閲覧日：2019 年 12 月 25 日

注 2…"DAS REICHSTAGSGEBÄUDE IN BERLIN VON PAUL WALLOT",Cosmos,1912,p41

注 3…M.Rapsilber"DAS REICHSTAGSGEBÄUDE IN BERLIN",Cosmos,1987, 前書き

< 図版典拠 >

図 1"DAS REICHSTAGSGEBÄUDE IN BERLIN VON PAUL WALLOT",Cosmos,1912,p54

図 2Deutscher Bundestag (<https://www.bundestag.de/besuche/architektur/reichstag/geschichte/verlauf-246958>) 閲覧日：2019 年 12 月 25 日

図 3 著者撮影

図 4 "DAS REICHSTAGSGEBÄUDE IN BERLIN VON PAUL WALLOT",Cosmos,1912,

図 5 同上

図 6 同上、Ⅶ巻 p32

図 7 同上、Ⅵ巻 p27

図 8 同上、Ⅹ巻 p53

図 9 同上、Ⅵ巻 p26

図 10Briefmarken-Bilder.de(<https://www.briefmarken-bilder.de/brd-briefmarken-1991/paul-wallot-baumeister>) 閲覧日：2019 年 11 月 19 日

図 11M.Rapsilber"DAS REICHSTAGSGEBÄUDE IN BERLIN",Cosmos,1987, 表紙

図 12 国立国会図書館デジタルコレクション「議員建築意匠設計図案集」 p40(<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/967480>) 閲覧日：2020 年 2 月 17 日

図 13 同上 p7

表 1 筆者作成

表 2 筆者作成

< 参考資料 >

・ "DAS REICHSTAGSGEBÄUDE IN BERLIN VON PAUL WALLOT",Cosmos,1987

・ M.Rapsilber "Das Reichstags-Gebäude:seine Baugeschichte und Künstlerische Gestaltung sowie ein Lebensabriss seines Erbauers Paul Wallot",Cosmos,1897

・ "Die Studentenschaft und Bismarck Teil 2 - Entwürfe" <https://www.bismarcktuerme.de/ebene3/historie/entwuerf.html> 閲覧日：2019 年 12 月 22 日

・ Deutscher Bundestag(<https://www.bundestag.de/besuche/architektur/reichstag/geschichte/verlauf-246958>) 閲覧日：2019 年 12 月 22 日

・ ZEIT KLICKS (<https://www.zeitclicks.de/kaiserzeit/zeitclicks/zeit/kultur/architektur-1/der-berliner-reichstag/>) 閲覧日：2020 年 2 月 17 日

・ 中谷礼仁『実況・近代建築史講義』LIXIL, 2017

長野宇平治のフランスルネサンスに関する蔵書： 『LA PEINTURE DÉCORATIVE EN FRANCE DU XVI AU XVIII SIÈCLE』について A Bibliographic Research Report of “LA PEINTURE DÉCORATIVE”

小岩正樹研究室 修士課程 1 年 高瀬道乃

1. はじめに

日本近代初期の設計者である長野宇平治の蔵書の一部が早稲田大学に寄贈され、現在、早稲田大学建築学教室に収蔵されている。小岩正樹研究室では 2019 年度に資料調査を行い、筆者はフランスルネサンスの装飾の図版集である『LA PEINTURE DÉCORATIVE EN FRANCE DU XVI AU XVIII SIÈCLE』（以下、「本書」とする）の調査を担当した。本稿では、本書の資料価値を長野蔵書としての意義という視点から評価することを目的とする。

2. 『LA PEINTURE DÉCORATIVE EN FRANCE DU XVI AU XVIII SIÈCLE』の書誌情報

表 1 書誌情報

La peinture décorative en France : du XVI ^e au XVIII ^e siècle		
寸法	330×460×45 [mm]	
装丁	ポートフォリオにカバー	
所蔵	早稲田大学建築学教室	
年代	1890-1900年頃か	
構成	表紙	扉1ページ・表紙1ページ
	序文	天アンカット1組（8ページ分）
	目次	3ページ分
	図版+説明	60組

本書は表 1 に示すように、大判の赤いボードによるカバー（図 1）でまとめられたフォリオ形式で、本文の構成は中表紙、イントロダクション、目次に加え、図を用いた解説のテキスト部分を含む 60 個のリトグラフの図版により構成される。図 2 に示すように中表紙には著者とみられる「P. GÉLIS-DIDOT」、出版社とみられる「LIBRAIRIE GÉNÉRALE DE



図 1 カバー表紙

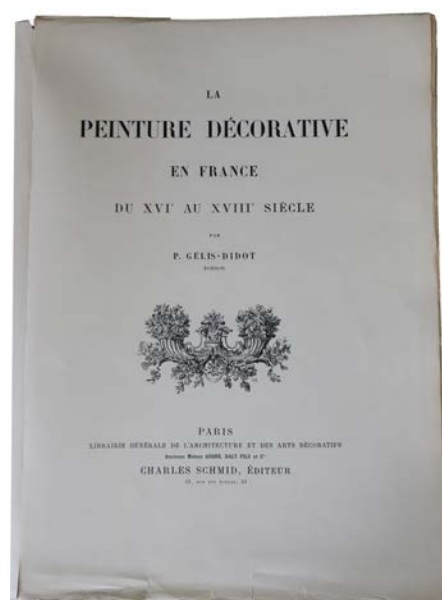


図 2 表紙

L'ARCHITECTURE ET DES ARTS DÉCORATIFS」、出版地と思われる「PARIS」、「ÉDITEUR」として「CHARLES SCHMID」などの文字と装飾とみられる図版が印刷されている。出版年とみられる情報は本書全体を通して発見できなかった。

目次には、図3に示すように1から60の番号とそれぞれにデザインされたマークのほか、図版に用いられる装飾がある建築とその部材と、カッコ付で所在地が1つまたは複数書かれている。以下の表2に目次の項目を整理したものを示す。フォンテーヌブロー宮殿が6件（No. 24、44-46、57-58）あり、最も多く登場している。

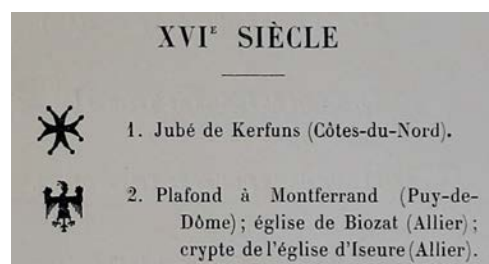


図3 目次の表記の一部

表2 目次の内容

No.	A-1	B-1	A-2	B-2	A-3	B-3	A-4	B-4
XVI ^e SIÈCLE								
1	Jubé de Kerfuns	(Côtes-du-Nord).						
2	Plafond à Montferrand	(Puy-de-Dôme)	; église de Biozat	(Allier)	; crypte de l'église d'Iseure	(Allier).		
3	Plafond du Palais de Justice de Rouen	(Seine-Inférieure)	; plafond du Palais de Justice de Dijon	(Côte-d'Or).				
4	Sculptures peintes, église de Poix	(Somme)	; cathédrale d'Amiens	(Somme)	; chapelle de Kerfuns	(Côtes-du-Nord).		
5	Chapelle de Vialinay	(Mayenne)	; église d'Étampes	(Seine-et-Oise).				
6	Château d'Ancy-le-Franc	(Yonne)	; panneaux provenant du château d'Écouen et actuellement au Musée de Cluny.					
7	Plafond à l'Hôtel Carnaval	(Paris)	; plafond au château du Lude	(Sarthe)	; plafond au château de Courtanvaux	(Sarthe)	; solives au château d'Artes	(Seine-et-Oise).
8	Château d'Écouen	(Seine-et-Oise).						
9	Château d'Orion	(Deux-Sèvres).						
10	Cathédrale d'Albi	(Tarn)						
11	Cathédrale d'Albi	(Tarn)	; abbaye de Jumièges	(Seine-Inférieure).				
12	Plafond au château d'Anet	(Eure-et-Loir)	; maison au Puy	(Haute-Loire)	; château de Beauzac	(Haute-Loire).		
13	Maison dite de Jeanne d'Arc, à Orléans	(Loiret).						
XVII ^e SIÈCLE								
14	Château de Fontainebleau	(Seine-et-Marne).						
15	Château de Cadillac	(Gironde).						
16	Château de Cadillac	(Gironde).						
XVIII ^e SIÈCLE								
17	Hôtel de la Vieuville	(Paris)	; église Saint-Eustache	(Paris).				
18	Maison dite du Grand-Veneur, à Laval	(Mayenne)	; plafond d'une maison à La Fère	(Aisne).				
19	Église des Carmes	(Paris)	; église Saint-Nicolas-des-Champs	(Paris).				
20	Manoir de Ragain	(Maine-et-Loire)	; porte d'une maison de la Grande Rue, au Mans	(Sarthe)	; lambris relevé au château de Lonné	(Orne).		
21	Bibliothèque de l'Arsenal	(Paris).						
22	Bibliothèque de l'Arsenal	(Paris).						
23	Salle du Livre d'Or, au Palais du Luxembourg	(Paris).						
24	Château de Fontainebleau	(Seine-et-Marne).						
25	Plafonds à solives, château de Lonné	(Orne)	; château de Dampierre	(Seine-et-Oise)	château de Wideville	(Seine-et-Oise).		
26	Palais de Justice de Dijon	(Côte-d'Or)	; maison occupée actuellement par la Société Générale, à Dijon	(Côte-d'Or).				
27	Hôtel de Vogüé, Dijon	(Côte-d'Or)	; maison occupée actuellement par la Société Générale, à Dijon; palais de Justice de Dijon.					
28	Hôtel de Colbert-Villacerf	(Paris)	; Hôtel de Rochegude, à Avignon	(Vaucluse).				
29	Palais de Justice de Trévoux	(Ain).						
30	Palais de Justice de Trévoux	(Ain).						
31	Palais de Justice de Trévoux	(Ain).						
32	Peintures d'un salon de l'hôtel Dangeau	(Paris)	; actuellement au Musée Carnavalet.					
33	Angle d'un plafond de l'hôtel Dangeau	(Paris)	; actuellement au Musée Carnavalet		; angle du plafond de la salle des Gardes de la Reine, palais de Versailles	(Seine-et-Oise).		
34	Plafond à l'hôtel de Bouthillier-Cha-vigny	(Paris)	; actuellement au Musée Carnavalet.					
35	Plafond de la Chambre du Parlement de Bretagne, palais de Justice de Rennes	(Ille-et-Vilaine).						
36	Palais de Justice de Rennes	(Ille-et-Vilaine).						
37	Palais de Justice de Rennes	(Ille-et-Vilaine).						
38	Palais de Justice de Rennes	(Ille-et-Vilaine).						
39	Galerie d'Apollon, au Louvre	(Paris).						
40	Galerie d'Apollon, au Louvre	(Paris).						
41	Plafond provenant d'un hôtel situé autrefois rue Picpus, à Paris.							
42	Maison rue Saint-Merri, à Paris; maison, à Ivry	(Seine).						
43	Hôtel de Mailly, à Paris.							
XIX ^e SIÈCLE								
44	Château de Fontainebleau	(Seine-et-Marne)	; château de Sceaux	(Seine).				
45	Château de Fontainebleau	(Seine-et-Marne).						
46	Château de Fontainebleau	(Seine-et-Marne).						
47	Plafond d'un hôtel de la rue d'Assas à Paris; panneaux provenant du château de Versailles et actuellement au Musée des Arts décoratifs.							
48	Plafond d'un hôtel de la rue d'Assas à Paris.							
49	Panneaux du Salon des Singes, au château de Chantilly	(Oise).						
50	Plafond du Salon des Singes, au château de Chantilly	(Oise).						
51	Panneaux de l'ancien hôtel de Rohan, aujourd'hui Imprimerie Nationale	(Paris).						
52	Peintures de l'ancien hôtel de Rohan, aujourd'hui Imprimerie Nationale	(Paris).						
53	Théâtre de Bordeaux	(Gironde)	maison à Bièvres	(Seine-et-Oise).				
54	Hôtel de Choiseul	(Paris).						
55	Pavillon de Musique, Parc du Petit Trianon, Versailles	(Seine-et-Oise).						
56	Pavillon de Musique, Parc du Petit Trianon, Versailles	(Seine-et-Oise).						
57	Château de Fontainebleau	(Seine-et-Marne).						
58	Château de Fontainebleau	(Seine-et-Marne).						
59	Panneaux d'une maison de Paris, aujourd'hui démolie.							
60	Hôtel Aguado, actuellement Mairie de la rue Drouot	(IX ^e arrondissement)	Paris; château de Nogent-sur-Marne	(Seine).				

凡例

A: 図版の装飾のある建築
の名称や部分

B: A がある都市

3. 本書に関する既往研究

国内の Gélis-Didot の出版物すべてを含めた蔵書状況を、CiNiiBooks と国立国会図書館サーチ、早稲田大学蔵書検索 WINE、慶應義塾大学蔵書検索 KOSMOS の 4 つのデータベースにより調査を行った結果を表 3 に示す。

表 3 国内の蔵書状況（2020 年 2 月 27 日現在）

番号	タイトル	著者	出版社	出版年	所蔵場所	説明
1	Hôtels et maisons de Paris : façades et détails	Gélis-Didot, Pierre.	Librairies-imprimeries réunies	1893	早稲田大学中央図書館	同じ著者による別の本で、出版年の明記あり
2	La peinture décorative en France : du XVIe au XVIIIe siècle	Gélis-Didot, Pierre.	Libr.-Imprimeries Réunies	1897(?)	慶應大学三田図書館	本書と同じもの、慶應 KOSMOS に出版年が(?)付きで記載
3	La peinture décorative en France : du XIe au XVIe siècle / 2é ed	Gélis-Didot, Pierre Laffillee, H.	Libr.-Imprimeries Réunies	1891(?)	慶應大学三田図書館	本書の「2é ed」版、慶應 KOSMOS に出版年が(?)付きで記載
4	Paris mansions & apartments, 1893 : facades, floor plans, & architectural details	Gélis-Didot, P.	Dover Publications	2011	国際基督教大学 図書館	同じ著者による別の本の再版、による序文の記載あり
5	Hotels et maisons de Paris : façades et détails	Gélis-Didot, P.	Librairies-Imprimeries Réunies	1893	九州大学芸術工学図書館	1と同じもの

本書と同じものは慶應大学三田図書館にあり、後年に発行されたと思われ掲載される図版も大きく異なる「2é ed」（第 2 版）も所蔵していた。日本での Gélis-Didot に関する記述や本書を対象または引用した研究は発見できなかった。P. GÉLIS-DIDOT の他の著書である、『Hotels et maisons de Paris : façades et détails』及びその復刻版である『Paris mansions & apartments, 1893 : facades, floor plans, & architectural details』については小林（2014）¹は、当時の街並みの復元の根拠に図版を引用していることを発見するのみであった。

国外では図書館での蔵書のほか、フランス、ドイツ、イギリスなどで本書を古書、図版の古美術としての流通が確認された。Gélis-Didot についてやその著書を対象とした論文は確認できないものの、『Paris mansions & apartments, 1893 : facades, floor plans, & architectural details』では、原典の P. GÉLIS-DIDOT の文章のほかに、Christopher Drew Armstrong²によって「INTRODUCTION」³が加えられている。この部分から、Gélis-Didot やこの図書の発行に際した研究に関する内容が読み取れた。また、University of Arizona Library による「Annual Report, 1957/1958」⁴では収蔵した資料のうち、本書は芸術分野の貴重な資料の 8 つのうちの 1 つとして記載があり、「Un patrimoine redécouvert : les dépôts du Centre national des arts plastiques à l'École nationale supérieure des beaux-arts de Paris(1809-1923)」⁵では Gélis-Didot の図面の取得のために、1901 年 5 月 29 日から合計 5,000 フランのを投じたこと、特に建築の古典様式よく示すという記述があり、美術史的な資料として収集されていることが確認できた。

また、Walter W.S. Cook（1923）はカタルーニャの初期の図版に関する研究⁶において各年代の様式を示すものとして本書の複数の図版を引用している。

4. Armstrong による Gélis-Didot 研究

先述したように、『Hotels et maisons de Paris : façades et détails』の「INTRODUCTION」には Christopher Drew Armstrong によって Gélis-Didot や彼の著述について解説が加えられており、現在発見できている唯一の一定のまとまりのある彼に関する説明を含む文章である。以下にその概要を述べる。

『Hotels et maisons de Paris : façades et détails』のパリの当時の建築の 100 点の図版及び実測図面は専門家の使用を目的として建築家の Gélis-Didot らによって制作された。図面が比較しやすいように同じ縮尺で描かれ、部屋名が記載されている。図版の建築の選択は体系的とはいえず、1880 年代から 1890 年代初頭のエリート住宅の特徴を一般的に感じさせる。Gélis-Didot は序文で各建物が当時の建築教育で無視されていた現代の設計問題に対する革新的な解決策や、新しく開発された材料と建設技術を取り入れており、パリのメゾンで再現された建築が現代ヨーロッパ文化を活気づける進歩の精神を象徴していると主張している。この本で描かれるベルエポックのフランス建築は、ニューヨークのマンハッタンや Gilded Age のアメリカのカントリーハウスに並ぶ豪華な邸宅を設計した建築家に影響を与えた。本書に紹介される作品を設計した建築家は万国博覧会やパリの先端的な文化や商業の建築に携わり、世界中に投影される建築のビジョンを形作った。

Armstrong は、19 世紀の終わりまでに建築的解決策がどのように建築分野の中で一般化されたかが、この図版集で示されていると評する。また、本書の Gélis-Didot が描いた作品のうち傑作として建築家 Paul-Adrien Gouin により設計された建築を挙げ、複雑なプログラムの巧妙な取り扱いや多色彩装飾や様々な素材を統合する規律はあるが複雑な構成は Victor Horta や Hector Guimard などの人物に引き継がれていると述べる。

5. 内容について

「AVANT-PROPOS」(序文)はテキスト、A から E の 5 つの図版とその作者 2 人についての注釈から成り、フォンテーヌブロー派を中心としたフランスルネサンスの独自の解釈と本書で示すことの狙いを述べている。

本編は、1 ページに複数の装飾の部分をレイアウトされた鮮やかな色彩のリトグラフの図版(図 4)につき、2 から 4 ページ程度の補助的な図版を含むテキストにより構成される。テキスト部には、図版の装飾がある場所、この装飾が施される経緯と施された時代、装飾の特徴について丁寧に表現されている。また、比較して見るべき作品を補助的な図版に示したり、ほかの図版との比較点についても言及している。



図 4 図版ページのレイアウトの例 (No.24)

序文で Gélis-Didot によって述べられたフランスルネサンスについての説明において、特に個人的な主張が大きいと思われる点についてまとめる。

まず、フランスルネサンスは単純にイタリアの影響を受けたものとしてとらえられがちだが、イタリアだけでなく、中国、ポンペイ、ローマ、エジプトの芸術にもその影響をうけているという点である。具体例として、Pillement⁷の18世紀に流行した寓話から作られた図版を用いて、その主題の極端な希少性だけでなく、中国の影響が見られるということを示している。

また、これらの影響に対して、フランスは独自の文化を創り出したということも主張されている。この点については、ディジョンとルーアンの2つの裁判所の天井を具体例に、「これらはイタリアの天井の構造だが、それらを飾る絵は非常に地味で、イタリアの影響がフランスの様式によって大きく修正されたことを示す」としている。

8 ページ目の文末には、

Cependant le génie français n'était pas mort, et nous essaierons de le démontrer plus tard, dans un ouvrage sur la peinture au XIX^e siècle, ouvrage qui démontrera, nous l'espérons, la prodigieuse vitalité artistique de la race française.

(本書「AVANT-PROPOS」p.8 文末より)

と記されている。この直前は、ギリシアやローマの様式の前に、ポンペイの様式や自然への回帰（ルネサンス的なもの）へと移行した時期があったが、それは明確な結果として残っていないことを述べている。つまり、このルネサンス的なものを「19世紀の驚異的な芸術活力を示す作品が実証した」と述べているのではないだろうか。

6. おわりに

〈4. Armstrong による Gélis-Didot 研究〉で述べたように、Armstrong は、Gélis-Didot はフランスの文化を活気づけるものとしてフランスの町並みの建築の評価できる点を描こうしたと考えた。本書の序文においても、紹介される装飾の独自性や後のフランス文化とのかかわりに重点を置いているように読み取ることができる。つまり、本書は紹介されている装飾を特に当時のフランスの文化を形成する重要な要因として扱っているのではないだろうか。



図5 序文のレイアウトの例
(「AVANT-PROPOS」p.3)



図6 Pillement による図版の例

< 注釈 >

注 1 …小林正美ほか「19 世紀パリの都市住居に見られる空間分割に関する研究：日本建築の空間分割手法による解析」2014 年度建築学会梗概集、日本建築学会、2014

注 2 …Gelis-Didot, Pierre ほか『Paris mansions & apartments, 1893 : facades, floor plans, & architectural details』Dover Publications、2011、

注 3 …「INTRODUCTION」の最後に署名とともに「Department of History of Art and Architecture University of Pittsburgh」と記載あり。

注 4 …University of Arizona Library; Bennett, Fleming「Annual Report, 1957/1958」『THE UNIVERSITY OF ARIZONA University Libraries UA CAMPUS REPOSITORY』、University of Arizona Library、1958

注 5 …Stéphane Allavena「Un patrimoine redécouvert : les dépôts du Centre national des arts plastiques à l'École nationale supérieure des beaux-arts de Paris (1809-1923)」『38 | 2019 Architecture et patrimoine des frontières. Entre identités nationales et héritage partagé』Ministère de la Culture、2019

注 6 …Walter W. S. Cook「The Earliest Painted Panels of Catalonia (I)」『The Art Bulletin, Vol. 5, No. 4 (Jun., 1923)』CAA、1923

注 7 …PILLEMENT, Jean-Baptiste (1727 ~ 1808) フランスの画家、図案家。装飾的な風景画家としては、ブーシェ風の垂流作品が多かったが、素描家としては非常に優れ、その素描に基づいた版画はヨーロッパ中に人気があってロココ趣味の伝播に一役買った。それらはフランスのみならず、イギリスでも出版された。彼は中国風装飾様式（シノワズリー）の伝播に重要な役割を果たした。また、18 世紀ポルトガル絵画の潮流に影響を与えたフランス人小画家グループの一人である。（『オックスフォード西洋美術事典』pp.859-860 より引用）

< 参考文献 >

- ・ Christopher Drew Armstrong「INTRODUCTION」『Paris mansions & apartments, 1893 : facades, floor plans, & architectural details』Dover Publications、2011
- ・ 佐々木英也『オックスフォード西洋美術事典』佐々木英也、1989

< 図版典拠 >

図 1 …筆者撮影、『LA PEINTURE DÉCORATIVE EN FRANCE DU XVI AU XVIII SIÈCLE』のカバー表紙（早稲田大学建築学教室所蔵）

図 2 …筆者撮影、『LA PEINTURE DÉCORATIVE EN FRANCE DU XVI AU XVIII SIÈCLE』の中表紙（早稲田大学建築学教室所蔵）

図 3 …筆者撮影、『LA PEINTURE DÉCORATIVE EN FRANCE DU XVI AU XVIII SIÈCLE』の目次 1 ページ目一部（早稲田大学建築学教室所蔵）

図 4 …筆者撮影、『LA PEINTURE DÉCORATIVE EN FRANCE DU XVI AU XVIII SIÈCLE』の No.24 の図版（早稲田大学建築学教室所蔵）

図 5 …筆者撮影、『LA PEINTURE DÉCORATIVE EN FRANCE DU XVI AU XVIII SIÈCLE』「AVANT-PROPOS」p. 3（早稲田大学建築学教室所蔵）

図 6 …筆者撮影、『LA PEINTURE DÉCORATIVE EN FRANCE DU XVI AU XVIII SIÈCLE』「AVANT-PROPOS」p. 7 挿絵部分（早稲田大学建築学教室所蔵）

表 1 …筆者作成

表 2 …『LA PEINTURE DÉCORATIVE EN FRANCE DU XVI AU XVIII SIÈCLE』の「TABLE DES MATIÈRES」をもとに筆者作成

表 3 …CiNiiBooks・国立国会図書館サーチ・早稲田大学蔵書検索 WINE・慶應義塾大学蔵書検索 KOSMOS をもとに筆者作成

焼失文化財における『田辺泰』ガラス乾板について

About "Yasushi Tanabe" Glass Plate in Burned Cultural Properties

小岩正樹研究室 学部 4 年 内田鞠乃

1. はじめに

本稿は早稲田大学建築学教室の資料調査報告としてまとめたものである。資料調査では、本校の名誉教授であり建築史研究室の初代教授である「田辺泰」（1899-1982）が残した数ある資料の中で田辺氏が撮影したガラス乾板データを扱う。ガラス乾板の数は膨大であり、被写体が不明である・名称がリスト化されていないなどまだまだ整理されていない資料の一つである。

調査に用いたものは田辺氏のガラス乾板史料の中でもガラス乾板をスキャンし、データ化された被写体未整理のものであり、原本は貴重書庫に保管されている。

調査ではこれらの写真史料の被写体の特定とリスト化による資料の整理を行うとともに、特に戦災等により焼失した文化財のガラス乾板データを対象としてこのガラス乾板史料の価値を示すことを目的とする。

2. 田辺泰に関して

表 1. 田辺泰 略歴

年代	事項
1899（明治 32）	1 月 14 日 広島で生まれる
1924（大正 13）	早稲田大学理工学部建築学科卒業
	同校助手
1925（大正 14）	同校助教授
1941（昭和 16）	同校教授
1950（昭和 25）	日本建築学会理事
1951（昭和 26）	〃
1952（昭和 27）	同会副会長
1953（昭和 28）	〃
1957（昭和 32）	厳有院や日光社寺の文化財などの 修理工事において委員長や工事監 督、技術専門委員を務める
1969（昭和 44）	
1972（昭和 47）	
1981（昭和 56）	

大正期から昭和初期にかけて京都・奈良を始めとする関西の社寺建築を中心に調査が行われていたのに対し田辺氏は、伊藤忠太に師事し関東の社寺・日光社寺を調査し、『徳川家霊廟』¹『日光廟建築』²を著した。加えて沖縄諸島の建築・庭園を調査し、その成果としてまとめられた『琉球建築』³は第二次世界大戦により被害を受ける以前の

沖縄の文化や建築を記録し、後世に伝えるものとして貴重なものとなっている。

地方の建築の研究を行った第一人者でもある田辺氏は研究や執筆を行う傍ら、日光社寺、関東にある東照宮などの文化財建造物保存修復事業（1932 年頃— 1981 年）の委員会に所属し、修理工事において嘱託や監修業務を担っていたことが各修理工事報告書に記されている。また文化財保護審議会専門委員として、浅草寺五重塔（1973 年 第一期工事）や鶴見・総持寺大祖堂（1965 年 竣工）、鎌倉・円覚寺本堂（1964 年 竣工）などの鉄筋コンクリートによる再建を担当していることから文化財や建造物の保存修復活動に尽力した人物と言える。

また田辺氏関連の資料として田辺文庫と呼ばれる「保存図」がある。保存図は全国の国宝・

重要文化財の図面作製をすべて手書きで行ったもので原本は奈良県にある。田辺文庫はその対となる複写したものを都道府県別にまとめており⁴、文化財の保存修復の記録として貴重な史料である。

3. 対象資料

3-1. ガラス乾板史料について

田辺氏が全国また世界各地を調査した際に撮影したと考えられるガラス乾板と呼ばれる昭和初期の写真の数は千を超える数となっている。

戦前の沖縄の様子を撮影した写真は『琉球建築』への掲載の有無まで記されており、ファイリングされ、まとめられている。また近代建築写真や社寺建築の写真を都道府県ごとにまとめたファイルが存在する⁵とされているが今回の調査では確認することができなかった。

データ化された写真は番号によりまとめられており、原本であるガラス乾板は箱番号がつけられ書庫内に保管されている。データ化された写真データはディスクに入っており、番号は箱番号と対応している。箱番号は 751 から 754 までとなっている。

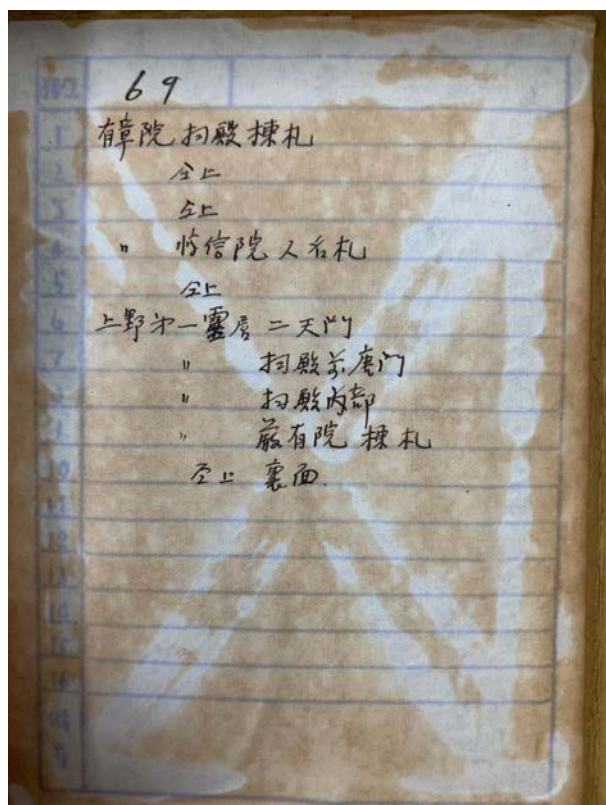


図 1. 原本のガラス乾板箱の裏書(筆者撮影)

ガラス乾板が保管されている当時の箱の裏に田辺氏の直筆と思われる字で対象建築が書かれているものもいくつかあるが撮影年月日までは把握することができなかった。

3-2. 被写体の選定

スキャンデータ化された未整理のガラス乾板データは約 2000 枚を超える。その中でもすでに大まかな対象の建造物や撮影地域など建造物に関する何らかの情報が明らかとなっているものは約 760 枚である。この一覧を表 2 に示し、この中からさらに人物や資料を写した写真を除き、被写体の選定を行った。

一覧の中で人物、資料を除き特に対象建築があいまいである 751-01 から 751-10 の写真について被写体の特定を行った。その結果を表 3 に示す。さらにその中で資料の価値を高める条件として現存状況を設定し、戦災によって焼失した台徳院霊廟を始めとする芝区・霊廟建築を選定しさらに調査・整理を行った。調査対象の霊廟建築は増上寺・寛永寺の境内地区に配置されている。

表 2.751-752 までのガラス乾板データ一覧

 : 被写体の特定範囲

箱番号	枚数	資料名	備考
751-01	11	埼玉県川越市、群馬県前橋市	
751-02	5	東京都 芝東照宮	
751-03	11	群馬県 世良田東照宮	
751-04	3	支那 雲崗 普駄山	
751-05	4	インド Ajanta Elona	
751-06	6	明治・大正・昭和時代社寺建築	
751-07	3	静岡県 天恩寺 宝台院	
751-08	15	滋賀県 彦根城	
751-09	15	東京市 芝区	
751-10	15	東京市 芝区 文章院 慎徳院 有章院	
751-11	13	東京市 武家門資料	
751-12	11	鳥取県 山佛寺 栲谿神社	
751-13	11	山口県付近 瑠璃光寺五重塔他	
751-14	8	千葉県 大聖寺不動堂他	
751-15	10	愛知県 名古屋市 本遠寺 観音寺 東照宮	
751-16	13	山形県 羽黒山他	
751-17	15	長野県 神明宮 安楽寺 国分寺	
751-18	14	長野県 松本城	
751-19	12	長野県 松本城	
751-20	8	広島県 東照宮	
751-21	9	広島県 厳島神社	
751-22	9	東村山正福寺	
751-23	8	正福寺	
751-24	7	京都	
751-25	11	昭和43年4月 奈良 ニコライ堂 (1枚)	
751-26	10	正倉院解体	
751-27	18	資料 イソクローム ウワレズミ	
751-28	14	資料 エジプト	
751-29	9	資料 羅馬	
751-30	19	資料 RUSSIAN BILET	
751-31	13		
751-32	18	室生寺 関谷正知 (10枚)	
751-33	7	刀のつば	1枚割れあり
751-34	5	阿佐ヶ谷住宅他	
751-35	29	今和次郎 土橋	
751-36	16	今和次郎	
751-37	10	今和次郎	
751-38	11	今和次郎	
751-39	14	今和次郎 肖像	
752-01	12	茨城県 水戸市 水戸市弘道館聖堂彰考館	
752-02	15	東京市 武家門資料	
752-03	47	島根県 松江城	
752-04	14	東京市 武家門資料	
752-05	15	岡山県 (高田城) 他	
752-06	8	建物遺跡	
752-07	14		
752-08	17	一匠舎	
752-09	9	支那家具	
752-10	3	出雲 神魂 住吉	
752-11	15		
752-12	17	好文亭	
752-13	12	唐門会第壹号 拓本	
752-14	11		
752-15	15	社寺 図面集	
752-16	103	灯籠 鐘 礎盤 瓦 窓 etc.	
	計 767		

4. 対象建築—芝区・霊廟建築について—

表 3. 一覧分析結果 .751-752 までのガラス乾板データ一覧

□ : 選定した調査対象建築

箱番号	建物名	地域名	建造物現存状況	文化財等登録状況	修理状況
751-01-01	仙波東照宮 拝殿	埼玉県川越	現存	国指定重要文化財	木部修理 塗替え 錆金具 屋根
751-01-02	仙波東照宮 幣殿	埼玉県川越	現存	国指定重要文化財	
751-01-03	仙波東照宮 本殿	埼玉県川越	現存	国指定重要文化財	
751-01-04	仙波東照宮 本殿 側面装飾	埼玉県川越	現存	国指定重要文化財	
751-01-05	仙波東照宮 本殿 側面装飾	埼玉県川越	現存	国指定重要文化財	
751-01-06	仙波東照宮 本殿 側面装飾	埼玉県川越	現存	国指定重要文化財	
751-01-07	川越 一番街	埼玉県川越	現存	重要伝統的建造物群保存地区	
751-01-08	川越風景	埼玉県川越			
751-01-09	前橋東照宮	群馬県前橋市	現存	前橋市指定文化財	
751-01-10	前橋東照宮	群馬県前橋市	現存	前橋市指定文化財	
751-01-11	前橋東照宮	群馬県前橋市	現存	前橋市指定文化財	
751-02-1	芝東照宮	東京都港区	現存	東京都指定文化財	
751-02-2	芝東照宮	東京都港区	現存	東京都指定文化財	
751-02-3	芝東照宮	東京都港区	現存	東京都指定文化財	
751-02-4	芝東照宮	東京都港区	現存	東京都指定文化財	
751-02-5	芝東照宮	東京都港区	現存	東京都指定文化財	
751-03-1	世良田東照宮 本殿正面	群馬県太田市	現存	国指定重要文化財	
751-03-2	世良田東照宮 軒下装飾	群馬県太田市	現存	国指定重要文化財	
751-03-3	世良田東照宮 軒下装飾	群馬県太田市	現存	国指定重要文化財	
751-03-4	世良田東照宮 軒下装飾	群馬県太田市	現存	国指定重要文化財	
751-03-5	世良田東照宮 本殿正面・側面全影	群馬県太田市	現存	国指定重要文化財	
751-03-6	世良田東照宮 内部	群馬県太田市	現存	国指定重要文化財	
751-03-7	世良田東照宮 軒下装飾	群馬県太田市	現存	国指定重要文化財	
751-03-8	世良田東照宮 拝殿側面	群馬県太田市	現存	国指定重要文化財	
751-03-9	世良田東照宮 棟札	群馬県太田市	現存	国指定重要文化財	
751-03-10	世良田東照宮 棟札	群馬県太田市	現存	国指定重要文化財	
751-03-11	世良田東照宮 棟札	群馬県太田市	現存	国指定重要文化財	
751-04-1	支那	中国			
751-04-2	雲岡石窟	中国山西省	現存	世界遺産	
751-04-3	普陀山多宝塔	中国浙江省	現存	世界遺産、文化財	
751-05-1	アジャンタ石窟群	インド	現存	世界遺産	
751-05-2	エローラ石窟群	インド	現存	世界遺産	
751-05-3	アジャンタ石窟群	インド	現存	世界遺産	
751-05-4	アジャンタ石窟群	インド	現存	世界遺産	
751-07-1					
751-07-2	天恩寺 山門	愛知県岡崎市	現存	国指定重要文化財	
751-07-3	天恩寺 仏殿	愛知県岡崎市	現存	国指定重要文化財	
751-08	彦根城	滋賀県彦根市	現存	国宝	
751-09	台徳院霊廟 (増上寺)	東京都	焼失	昭和 5 年 国宝指定	惣門以外が焼失
751-10	芝区霊廟建築	東京都	一部焼失	一部文化財指定であったが 焼失により解除	

■被写体の特定・整理結果

751 から 754 のすべての写真の中から、芝区・霊廟建築と確認できたものを抽出し、被写体の特定・整理した結果を表 5 に示す。戦前の様子を明確に判断できる写真が掲載されており、被写体の特定を行う際に用いた資料は以下の 4 つである。

- ①田辺泰『徳川家霊廟』彰国社 1942
- ②東京府・田辺泰『東京府史蹟保存物調査報告書 第 11 冊 芝・上野徳川家霊廟』1932-1934
- ③文化財保護委員会『戦災等による焼失文化財 [3] (建造物篇 霊廟・東照宮)』1964
- ④奈良文化財研究所『国宝・重要文化財建造物写真乾板目録 I』2005

今回調査した被写体の特定、整理結果としては、まずこのガラス乾板は東京府の史蹟保存物調査報告書作成 (前項②) のため、または調査のために撮影されたものであると考えられる。しかし報告書に掲載されている写真と一致するものはなかった。

■芝区・霊廟建築の概要

戦前全部で 15 を超える廟が存在していた。その中で戦災等により焼失したものが以下の通りである。

表 4. 芝区・霊廟建築焼失状況一覧

増上寺					
名称	廟対象人物	国宝（旧）指定年月日	焼失年月日	焼失状況	
安立院	安国殿（東照宮）	家康廟	1915 年（大正 4 年）3 月 26 日 本殿 1942 年（昭和 17 年）12 月 22 日その他	1950 年（昭和 25 年）2 月 25 日	戦災により焼失。なお附の銅灯籠は焼失しなかったが、本体が焼失したのであわせて指定解除された。
恵眼院	台徳院	秀忠廟	1930 年（昭和 5 年）5 月 23 日 1942 年（昭和 17 年）12 月 22 日 附追加、構造形式変更	1945 年（昭和 20 年）5 月 25 日	戦災により焼失。なお奥院玉垣は焼失したものではないが、合わせて国宝（旧）の指定を解除された。勅額門、惣門、丁子門、奥院御成門は焼失をまぬかれた。
最勝院	崇源院	秀忠室浅井氏廟	1930 年（昭和 5 年）5 月 23 日	1945 年（昭和 20 年）5 月 25 日	1945 年（昭和 20 年）5 月 25 日、戦災によって焼失。なお附指定を受けていた崇源院宝塔、天英院宝塔、広大院宝塔、桂昌院宝塔、月光院宝塔はいずれも焼失をまぬかれた。そのため改めて文昭院霊廟の附とされたが 1958 年（昭和 33 年）にいたり、墓地改葬のため破壊されることとなったため指定を解除された。
	天英院	家宣室近衛氏廟			
真乘院	文昭院	家宣廟	1930 年（昭和 5 年）5 月 23 日 1942 年（昭和 17 年）12 月 22 日 附追加、構造形式変更	1945 年（昭和 20 年）3 月 10 日	1945 年（昭和 20 年）3 月 10 日戦災によって焼失。なお附指定を受けていた銅燈籠 138 基のうち 98 基は焼失をまぬかれたが 1957 年（昭和 32 年）移転によって原一を離れることとなり指定解除。 奥院宝塔、奥院中門及び附の慎徳院宝塔、昭徳院宝塔、寛院宮宝塔は焼失をまぬかれたが 1958 年（昭和 33 年）にいたり、墓地改葬のため破壊されることとなったため旧台徳院霊廟附の各宝塔とともに指定を解除された。
瑞通院	有章院	家継廟	1930 年（昭和 5 年）5 月 23 日 1942 年（昭和 17 年）12 月 22 日 附追加、構造形式変更	1945 年（昭和 20 年）3 月 10 日・5 月 25 日	1945 年（昭和 20 年）3 月 10 日戦災によって大部分が焼失。残った鐘楼も 5 月 25 日に焼失。なお附指定を受けていた銅燈籠 8 基（文昭院 8 基、惇信院 4 基）は焼失をまぬかれていたが、1957 年（昭和 32 年）移転によって原位置を離れることとなったので指定解除。また奥院宝塔も焼失をまぬかれていたが、1958 年（昭和 33 年）にいたり、墓地改葬のため破壊されることとなったため指定解除された。
	惇信院	家重廟			
寛永寺					
	巖有院	家綱廟	1930 年（昭和 5 年）5 月 23 日	1945 年（昭和 20 年）3 月 10 日	1945 年（昭和 20 年）3 月 10 日戦災によって焼失。

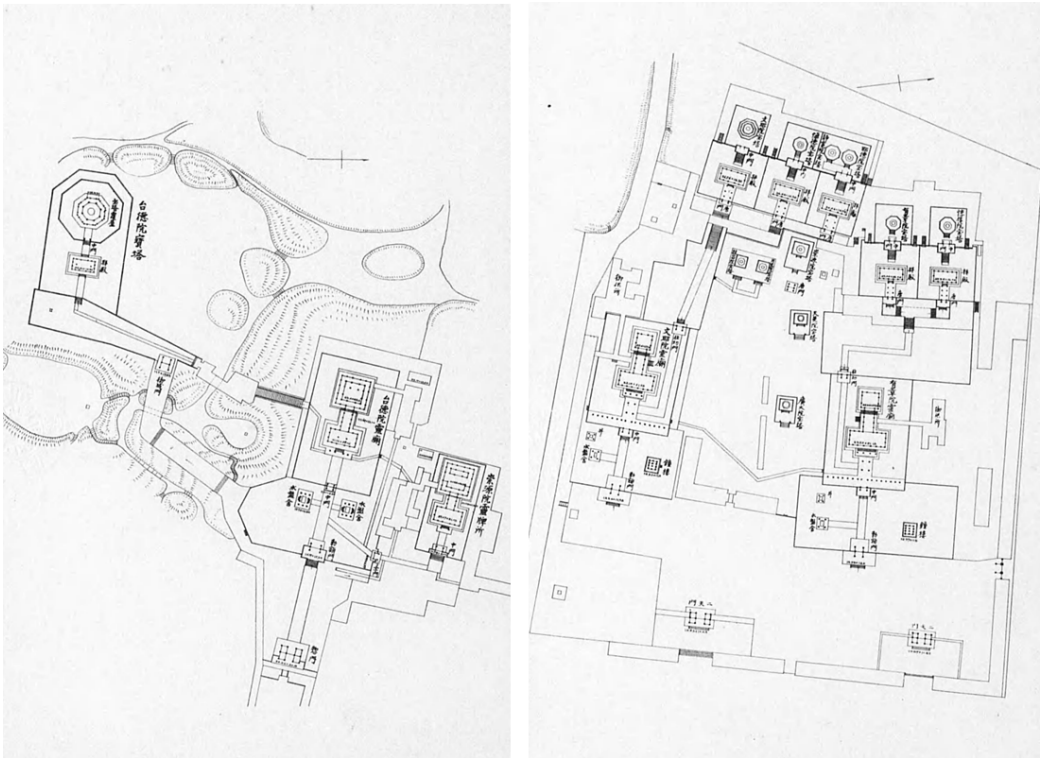


図 2. 増上寺境内北廟配置図：（左）台徳院・崇源院 （右）文昭院・有章院・各宝塔

■台徳院霊廟

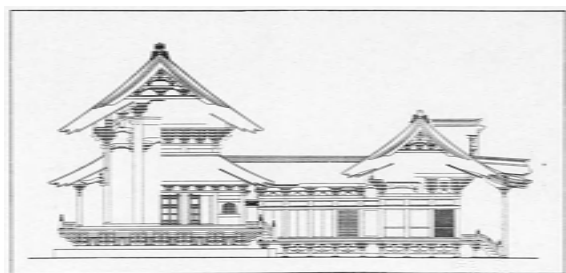


図 3. 台徳院霊廟立断面図



図 4. 英国ロイヤル・コレクション所蔵「台徳院殿霊廟模型」
現在増上寺宝物展示室にて展示中

焼失した霊廟の中でも戦前から日本のみならず世界的にも注目されていたものが台徳院霊廟である。台徳院霊廟は 1633 年（寛永 9 年）正月 24 日、二代目将軍徳川秀忠の薨去を受け着工された。増上寺の初期結構である三門や本堂の作事は家康直属の京都出身の御大工、中井正清一派によるものであったが、台徳院霊廟は同年 9 月に大工組織の再編によって幕府作事方が設けられるなど当時の造営組織構成の契機となっている。幕府作事方は江戸の大工集団である木原・鈴木の両家を御大工頭とし、新たに甲良・平内・鶴の棟梁を加えた。同じく幕府作事方によって造営された日光東照宮の先行するものであったとされる⁶。建築装飾は当時来日した外国人にとっても珍しく、英国デザイナーであるクリストファー・ドレッサーや建築家ジョサイア・コンドルが水彩画によって当時の台徳院霊廟の様子が残されている⁷。

第二次世界大戦により焼失した霊廟だが、明治末期に製作された 10 分の 1 の精密な模型が英国ロイヤル・コレクションにて保管されていることが 1996 年（平成 8 年）に明らかとなった。この模型は 1910 年（明治 43 年）に開催された日英博覧会の東京市の展示物として出品される目的で、1909 年（明治 42 年）に東京美術学校（現東京国立技術大学）の元作製された。同校図面科教授の古宇田実、彫刻科教授高村光雲他 9 名により、台徳院霊廟の綿密な調査とともに専門家を動員し復元されたこの模型は、模型そのものが文化財とも言える価値を持つ貴重な史料である⁸。

5. 写真分析

■写真の撮り方



図 5. 田辺泰ガラス乾板「文昭院霊廟 勅額門」



図 6. 『徳川家霊廟』より「文昭院霊廟 勅額門」

完全に一致した写真ではないが、資料と同一アングルで撮影されたものが存在する（図5・6参照）。資料に掲載されている写真は広角で撮り、建物全体の概要が分かるという傾向にあると考えられる一方で田辺氏撮影のガラス乾板は、同一アングルでも比較的建物に近く装飾などの詳細を読み取ることができるという特徴が見られる。（図7・8参照）



図7. 田辺泰ガラス乾板「台徳院霊廟 拝殿」筆者加筆

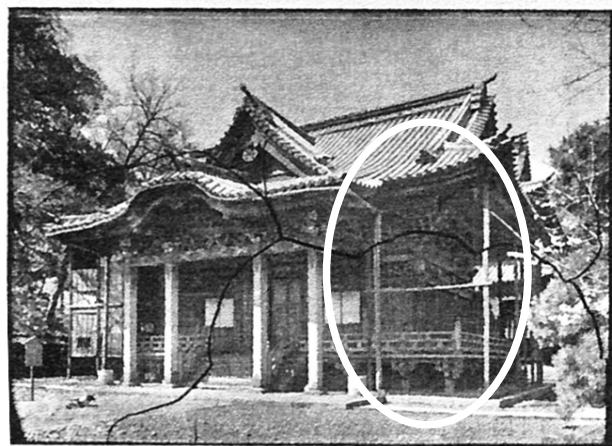


図8. 奈良文化財研究所ガラス乾板「台徳院霊廟 拝殿」筆者加筆

また、台徳院霊廟では図7・8に印をつけた部分で建物に変化が見られる。田辺氏のガラス乾板撮影当時とは板張りが施されていたが『国宝・重要文化財建造物写真乾板目録Ⅰ』の写真では骨組みだけとなっており、同一アングルであることから比較が可能となり工事の有無等、時代背景や出来事の推測を行うことができる。

■組物・装飾意匠の詳細

田辺氏撮影のガラス乾板に見られる特徴として挙げられるのが組物や軒下、門や扉、柱・礎石など細部に関する装飾や情報を内包したのが多いという点である。戦災文化財に関する本の写真のほとんどが奈良文化財研究所のガラス乾板データを用いており広角な外観写真に加え、広角な内観をとらえた写真など内部空間の全容を把握することが可能な情報となっている。一方で田辺氏が執筆した『徳川家霊廟』や『東京府史蹟保存物調査報告書 第11冊 芝・上野 徳川家霊廟』に用いられている写真には内部情報は少なく、外観に加え部分詳細的なものも多く田辺氏の研究対象や関心が寄せられている部分など撮影者の意図を読みとることができる。

また、内部詳細では棟札より狩野派の絵師が造営に携わっていたことが分かっており、狩野派絵師による襖絵と考えられる作品を確認することができる。さらに建築学会論文より古川敏夫氏による『「江戸図屏風」の世界、その描く情景—駿河大納言忠長邸の建築描写について—』⁹では台徳院霊廟の景観が取り上げられている。日光にて襖絵が修復公開されていることから、内部詳細から狩野派の作品として調査すること、屏風図の解明を行うなど建築だけでなく美術的観点からも価値の高い資料だと考えられる。



図 9. 奈良文化財研究所のガラス乾板
「台徳院霊廟 本殿内部」

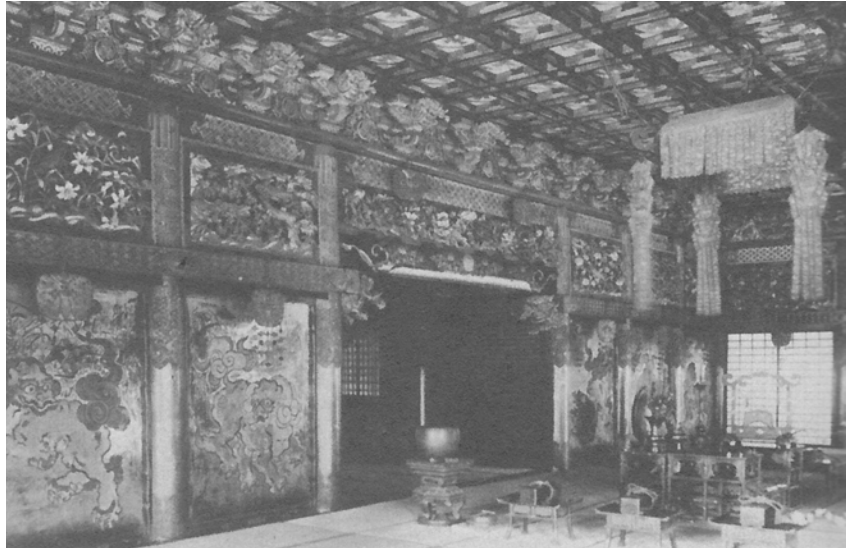


図 10. 『戦災等による焼失文化財 建造物篇』のガラス乾板
「文昭院霊廟 拝殿内部」



図 11. 田辺泰ガラス乾板
「有章院霊廟 勅額門柱脚」

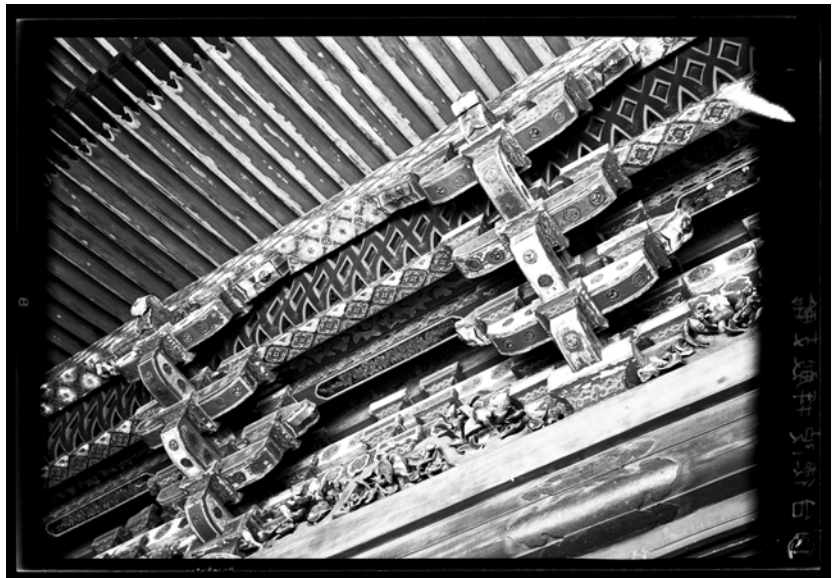


図 12. 田辺泰ガラス乾板「台徳院霊廟 拝殿支輪」



図 13. 田辺泰ガラス乾板
「常憲院霊廟 拝殿内部」



図 14. 江戸図屏風・増上寺部分

■宝塔・棟札

ガラス乾板データの中でも数が多かったものが宝塔と棟札・人名札である。特に宝塔については建築学会論文において天木詠子氏・波多野純氏による「徳川將軍家の葬儀のための建築—宝塔構造の変遷と覆屋について—」¹⁰ 研究が行われている。この研究での参考資料として田辺氏の『徳川家霊廟』が用いられている。また『徳川家霊廟』に掲載されていない宝塔の背面の写真もいくつかあり、霊廟建築を研究するにあたって、田辺氏のガラス乾板データは貴重な史料となりうると考えられる。



図 15. 田辺泰ガラス乾板
「有章院等 天明棟札」

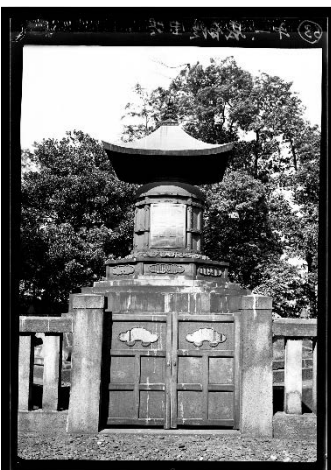


図 16. 田辺泰ガラス乾板
「巖有院 宝塔」

棟札・人名札については多くが『東京府史蹟保存物調査報告書・第11冊 芝・上野徳川家霊廟』に掲載されている。棟札に関しては時代ごとの異なった棟札が撮影されており、建立や修復の際の工事組織体系を明らかにすることが可能となっている。

6. 台徳院霊廟・増上寺研究から見る田辺氏のガラス乾板の重要性

台徳院霊廟など多くの焼失文化財があった増上寺旧境内地区について研究を行っているのが伊坂道子氏である。伊坂氏は「台徳院霊廟修復記にみる増上寺南廟と境内の様相」¹¹ 『増上寺旧境内地区歴史的建造物等調査報告書』¹²などを始めとした多くの台徳院霊廟や増上寺に関する研究をまとめている。その際にも参考資料として田辺氏の著書が用いられている。

また、外国人として台徳院霊廟に関する研究を行っているのがウィリアム・コールドレイク氏であり、戦後発見された模型の詳しい調査を英国より依頼された人物である。コールドレイク氏が模型の整合性を調査する際に用いていたのが田辺氏の図面と資料である。両者ともに田辺氏の先行研究を研究の一部として用いている。これらの研究から今回調査整理を行ったガラス乾板は、公開されていない史料であるが当時の様相を知る手段また、建築の詳細・細かな装飾を解明する手段として今後の研究において重要な史料となると考えられる。

コールドレイク氏は特に台徳院霊廟に関して、戦前の様子を知る手立てとして写真を用いてきたが、白黒の写真では明らかとならない色彩表現や装飾については発見された模型が多くの情報を持つとして模型の価値と重要性を説いている¹³。台徳院霊廟の細かな装飾の整合性を確認するために細部が映し出された写真とともに、模型の学術的な意味での重要性を再確認することに田辺氏のガラス乾板の史料価値を再確認することにつながると考える。

7. まとめ

出版物に掲載されているガラス乾板データと比較しても、世間には出ておらず細部を中心とした情報を持つ田辺氏のガラス乾板データは価値の高いものであると言える。またこれらの情報を用いることで戦災等によりかつての情報が少ない建築において、その記録を残すことがで

きるとともに更なる研究の資料として貴重なものであると考えられる。

資料調査では田辺氏の数あるガラス乾板データから芝区・霊廟建築を選定したが、未整理の写真の中には昭和初期の日本の街並みや調査によって訪れた海外の遺跡や資料の写真、インドや中国の世界遺産で修復前のものなど、現存するものの日本だけでなく世界の資料も多く存在している。これらの資料を整理することで今後の研究に活きる資料として田辺氏のガラス乾板データはとても貴重なものであることが明らかとなった。

〈註釈〉

注 1…田辺泰『徳川家霊廟』彰国社 1942

注 2…田辺泰『日光廟建築』彰国社 1946

注 3…田辺泰、巖谷不二雄 著『琉球建築』座右宝刊行会 1937

注 4,5…山崎幹泰「田辺泰文庫・奈良県ファイルの図面写真について―塚本松治郎と奈良古社寺実測図―」史標 37 号

注 6…伊坂道子編「増上寺旧境内地区歴史的建造物等調査報告書」第 5 章「霊廟の修復と儀式―旧台徳院霊廟惣門―」p.68-75 境内研究事務局 2003

注 7…伊坂道子編「増上寺旧境内地区歴史的建造物等調査報告書」鈴木博之「松原―増上寺旧境内のすがたとかたち―」p.8-11 境内研究事務局 2003

注 8…伊坂道子編「増上寺旧境内地区歴史的建造物等調査報告書」ウィリアム・コールドレイク「蘇る台徳院霊廟―英国ロイヤルコレクションに眠る建築模型―」p.110-115 境内研究事務局 2003

注 9…古川敏夫「『江戸図屏風』の世界、その描く情景―駿河大納言忠長邸の建築描写について―」日本建築学会大会学術講演梗概集 2008

注 10…天木詠子・波多野純「徳川將軍家の葬儀のための建築―宝塔構造の変遷と覆屋について―」日本建築学会学術講演梗概集 2013

注 11…伊坂道子「台徳院霊廟修復記にみる増上寺南廟と境内の様相」日本建築学会関東支部研究報告集 1997

注 12…伊坂道子編「増上寺旧境内地区歴史的建造物等調査報告書」境内研究事務局 2003

〈図版典拠〉

図 1…筆者撮影

図 2…東京府・田辺泰「東京府史蹟保存物調査報告書」第 11 冊 芝・上野徳川家霊廟」1932-1934 p.56-57

図 3…東京府・田辺泰「東京府史蹟保存物調査報告書」第 11 冊 芝・上野徳川家霊廟」1932-1934 p.61

図 4…増上寺宝物展示室 <https://www.zoji.or.jp/takara/> 2020.2.25 閲覧

図 5…田辺泰ガラス乾板「文昭院霊廟 勅額門」

図 6…田辺泰『徳川家霊廟』彰国社 1942 p.15「文昭院霊廟 勅額門」

図 7…田辺泰ガラス乾板「台徳院霊廟 拝殿」

図 8…奈良文化財研究所ガラス乾板「台徳院霊廟 拝殿」

図 9…奈良文化財研究所ガラス乾板「台徳院霊廟 本殿内部」

図 10…伊坂道子編「増上寺旧境内地区歴史的建造物等調査報告書」境内研究事務局 2003
p.123 掲載 『戦災等による焼失文化財 建造物篇』のガラス乾板「文昭院霊廟 拝殿内部」

図 11…田辺泰ガラス乾板「有章院霊廟 勅額門柱脚」

図 12…田辺泰ガラス乾板「台徳院霊廟 拝殿支輪」

図 13…田辺泰ガラス乾板「常憲院霊廟 拝殿内部」

図 14…伊坂道子編「増上寺旧境内地区歴史的建造物等調査報告書」境内研究事務局 2003

図 15…田辺泰ガラス乾板「有章院等 天明棟札」

図 16…田辺泰ガラス乾板「巖有院 宝塔」

表 1…筆者作成 (参考: 東京文化財研究所 <https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/10233.html> 2019.12.22 閲覧)

表 2,3…筆者作成

表 4…筆者作成 (参考: 文化財保護委員会『戦災等による焼失文化財 [3] (建造物篇 霊廟・東照宮)』1964)

表 5…筆者作成

〈参考文献〉

1…田辺泰『徳川家霊廟』彰国社 1942

2…東京府・田辺泰『東京府史蹟保存物調査報告書. 第 11 冊 芝・上野徳川家霊廟』1932-1934

3…文化財保護委員会『戦災等による焼失文化財 [3] (建造物篇 霊廟・東照宮)』1964

4…奈良文化財研究所『国宝・重要文化財建造物写真乾板目録 I』2005

5…伊坂道子編「増上寺旧境内地区歴史的建造物等調査報告書」境内研究事務局 2003

6…産経ニュース「国宝「台徳院殿霊廟」空襲で消失→「まさか…」英国で国宝級の精巧
模型発見→増上寺で日本初公開」2015 <https://www.sankei.com/life/photos/150410/lif1504100018-p1.html> 2020.2.10 閲覧

調査対象資料

- ①田辺泰『徳川家霊廟』彰国社 1942
 ②東京府・田辺泰『東京府史蹟保存物調査報告書 第 11 冊 芝・上野徳川家霊廟』1932-1934
 ③文化財保護委員会『戦災等による焼失文化財 [3] (建造物篇 霊廟・東照宮)』1964
 ④奈良文化財研究所『国宝・重要文化財建造物写真乾板目録 I』2005

表 5. 田辺泰ガラス乾板データのうち霊廟建築に関する被写体一覧

データ番号 (箱番号)	対象物名称	他の資料との比較調査	備考
751-9-01	台徳院霊廟 惣門 (正面)	同一写真の掲載は見られない	
751-9-02	台徳院霊廟 勅額門 (正側面)	同一写真の掲載は見られない	①と②は同一写真を使用
751-9-03	台徳院霊廟 水盤舎 (正側面)	同一写真の掲載は見られない	①と②は同一写真を使用
751-9-04	〃	〃	〃
751-9-05	台徳院霊廟 拝殿 (正面)	同一写真の掲載は見られない	④と異なる箇所が見られる
751-9-06	台徳院霊廟 奥院拝殿外部入口	同一写真の掲載は見られない	筆者推測
751-9-07	台徳院霊廟 人名札 元禄 表	恐らく②と同一	筆者推測
751-9-08	台徳院霊廟 人名札 元禄 裏	恐らく②と同一	筆者推測
751-9-09	崇源院霊牌所 中門	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	①と同一アングル ②は柵あり
751-9-10	崇源院霊廟 宝塔前唐門	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	①と同一アングル
751-9-11	〃	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
751-9-12	崇源院霊廟 門入口	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
751-9-13	文昭院霊廟 勅額門・透塀	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	①と同一アングル
751-9-14	文昭院霊廟 鐘樓	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	①と同一アングル
751-9-15	文昭院霊廟 中門・左右廊 (正面)	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	①と同一アングル
751-10-01	慎徳院 宝塔	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	①と同一アングル 現存
751-10-02	〃	〃	〃
751-10-03	有章院霊廟 霊屋前中門・左右廊	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	①と同一アングル ①と②は同一写真を使用
751-10-04	有章院霊廟 水盤舎及井戸屋	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	①と同一アングル ①と②は同一写真を使用
751-10-05	有章院霊廟 鐘樓	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	①と同一アングル ①と②は同一写真を使用
751-10-06	有章院霊廟 勅額門・透塀	①③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	②に写真が掲載されていない
751-10-07	有章院霊廟 門入口	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
751-10-08	文昭院霊廟 棟札 表	恐らく②と同一	筆者推測
751-10-09	文昭院霊廟 棟札 裏	恐らく②と同一	筆者推測
751-10-10	文昭院霊廟 棟札 寛政 表	恐らく②と同一	筆者推測
751-10-11	文昭院霊廟 棟札 寛政 表	恐らく②と同一	筆者推測
751-10-12	静寛院宮 宝塔	①のみ写真掲載あり	①と同一アングル 現存
751-10-13	昭徳院 宝塔	①のみ写真掲載あり	
751-10-14	慎徳院 宝塔	①のみ写真掲載あり	
751-10-15	静寛院宮 宝塔	①のみ写真掲載あり	
753-01-01	巖有院殿 棟札	同一写真の掲載は見られない	
753-01-02	常憲院霊廟 拝殿 (内部)	①③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	②に写真が掲載されていない
753-01-03	〃		
753-01-04	常憲院・有徳院・孝恭院 棟札 寛永	同一写真の掲載は見られない	
753-01-05	大猷院・巖有院・凌明院 棟札 天明	同一写真の掲載は見られない	
753-01-06	巖有院霊廟 勅額門	①②と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	①と同一アングル ①と②は同一写真を使用
753-01-07	有章院霊廟 棟札 享保	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
753-01-08	文昭院霊廟 宝塔 (背面)	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
753-01-09	有章院霊廟 宝塔 (背面)	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	

753-01-10	第二靈屋 本殿扉	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	写真に名称記載
753-01-11	第二靈屋 拝殿唐門	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	写真に名称記載
753-01-12	第二靈屋 二天門	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	筆者推測
753-01-13	常憲院・有徳院・孝恭院 棟札 文政 表	恐らく②と同一	筆者推測
753-01-14	常憲院・有徳院・孝恭院 棟札 文政 裏	恐らく②と同一	筆者推測
753-01-15	嚴有院 棟札 天保	恐らく②と同一	筆者推測
753-01-16	大猷院・嚴有院・凌明院 棟札 文政	恐らく②と同一	筆者推測
753-01-17	大猷院・嚴有院・凌明院 棟札 天保 表	恐らく②と同一	筆者推測
753-01-18	大猷院・嚴有院・凌明院 棟札 天保 裏	恐らく②と同一	筆者推測
753-01-19	有章院靈廟 人名札 裏	恐らく②と同一	筆者推測
753-01-20	有章院靈廟 人名札 表	恐らく②と同一	筆者推測
753-01-21	有章院・惇信院 棟札 裏	恐らく②と同一	筆者推測
753-01-22	有章院・惇信院 棟札 表	恐らく②と同一	筆者推測
754-30-01	台徳院靈廟 惣門 組組物 詳細	同一写真の掲載は見られない	現存
754-30-02	台徳院靈廟 惣門 屋根裏側	同一写真の掲載は見られない	
754-30-03	台徳院靈廟 勅額門 軒廻り 詳細	同一写真の掲載は見られない	
754-30-04	台徳院靈廟 勅額門 柱礎石 詳細	同一写真の掲載は見られない	
754-30-05	台徳院靈廟 勅額門 柱礎石 詳細	同一写真の掲載は見られない	
754-30-06	台徳院靈廟 惣門 軒廻り	同一写真の掲載は見られない	
754-30-07	台徳院靈廟 水盤舎 軒廻り 詳細	同一写真の掲載は見られない	
754-30-08	台徳院靈廟 水盤舎 屋根裏側	同一写真の掲載は見られない	
754-30-09	台徳院靈廟 中門 透塀	同一写真の掲載は見られない	
754-30-10	台徳院靈廟 中門 透塀 詳細	同一写真の掲載は見られない	
754-30-11	(台徳院靈廟) 組物	同一写真の掲載は見られない	筆者推測・詳細な対象が特定できなかった
754-30-12	台徳院靈廟 靈屋拝殿 斗拱	①とほぼ同じ (同一の可能性)	
754-30-13	台徳院靈廟 拝殿 内部天井 組物	同一写真の掲載は見られない	
754-30-14	台徳院靈廟 拝殿 扉装飾 詳細	同一写真の掲載は見られない	
754-30-15	台徳院靈廟 本殿 組物	同一写真の掲載は見られない	
754-30-16	(崇源院靈廟) 柱土台部分装飾	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	筆者推測・詳細な対象が特定できなかった
754-30-17	(崇源院靈廟) 柱礎石部分装飾	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	筆者推測・詳細な対象が特定できなかった
754-30-18	(崇源院靈廟) 門装飾	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	筆者推測・詳細な対象が特定できなかった
754-30-19	(崇源院靈廟) 門・軒廻り装飾	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	筆者推測・詳細な対象が特定できなかった
754-30-20	崇源院靈廟 靈牌所靈屋拝殿 向拝	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-21	崇源院靈廟 靈牌所靈屋本殿 軒下詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-22	崇源院靈廟 宝塔前唐門 軒下詳細	①と同一	
754-30-23	文昭院靈廟 勅額門 軒下詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-24	文昭院靈廟 勅額門 柱礎石 詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-25	文昭院靈廟 勅額門 壁面詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-26	文昭院靈廟 勅額門 扉詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	

754-30-27	文昭院霊廟 鐘樓 軒下詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-28	文昭院霊廟 中門 柱礎石 詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-29	文昭院霊廟 水盤舎 (恐らく震災倒壊時)	①と同一	筆者推測
754-30-30	文昭院霊廟 中門左右廊	①と同一	筆者推測
754-30-31	文昭院霊廟 奥院 柱礎石 詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-32	文昭院霊廟 仕切門 内透塀 詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-33	文昭院霊廟 奥院唐門	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	③と同一アングル
754-30-34	(文昭院霊廟) 門 詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	筆者推測・詳細な対象が特定できなかった
754-30-35	(文昭院霊廟) 門 詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	筆者推測・詳細な対象が特定できなかった
754-30-36	昭徳院 宝塔前唐門 詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-37	有章院霊廟 勅額門 柱詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-38	有章院霊廟 勅額門 柱礎石 詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-39	有章院霊廟 勅額門 扉 詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-40	有章院霊廟 勅額門 天井詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-41	有章院霊廟 勅額門 軒下詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-42	有章院霊廟 拝殿廊 虹梁・天井 詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-43	有章院霊廟 霊屋前中門 透塀詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-44	有章院霊廟 霊屋拝殿 向拝	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-45	(有章院霊廟) 床下 組物	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	筆者推測・詳細な対象が特定できなかった
754-30-46	有章院霊廟 棟札 4 枚 人名札 1 枚	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-47	有章院霊廟 霊屋 脇仕切門	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-48	有章院霊廟 霊屋 脇仕切門 軒廻り 詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-49	有章院霊廟 霊屋 宝塔前唐門	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-50	有章院霊廟 霊屋 宝塔前唐門 軒廻り	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-51	有章院霊廟 霊屋 拝殿前唐門 柱礎石	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-52	(有章院霊廟 拝殿) 階段装飾 詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	筆者推測・詳細な対象が特定できなかった
754-30-53	(有章院霊廟 拝殿)	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	筆者推測・詳細な対象が特定できなかった
754-30-54	有章院霊廟 霊屋 宝塔前唐門	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-55	惇徳院霊廟 宝塔拝殿 唐門	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-56	惇徳院霊廟 宝塔拝殿 向拝	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-57	惇徳院霊廟 宝塔拝殿 内部天井 詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-58	惇徳院霊廟 宝塔拝殿 内部天井 詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-59	惇徳院霊廟 唐門	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-60	惇徳院霊廟 唐門 扉廻り 詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	
754-30-61	(有章院霊廟 本殿) 内部	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	筆者推測・詳細な対象が特定できなかった
754-30-62	(有章院霊廟 本殿) 内部 柱上部 詳細	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	筆者推測・詳細な対象が特定できなかった
754-30-63	(文昭院霊廟 本殿) 内部	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	筆者推測・詳細な対象が特定できなかった
754-30-64	巖有院 宝塔	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	筆者推測・詳細な対象が特定できなかった
754-30-65	文恭院 宝塔	①に掲載	
754-30-66	凌明院 宝塔	①に掲載	
754-30-67	組物	①②③と同一写真の掲載は見られない (④未確認)	筆者推測・詳細な対象が特定できなかった

ミャンマー・バガン遺跡群の方位観 (1)

The Orientation of a Citadel and its Architectures in Bagan, Myanmar (1)

小岩正樹研究室 研究員 黒岩千尋

1. バガン遺跡群の配置を構成する原理は何か？

バガン遺跡群は、ミャンマーを南北につらぬく大河エーヤワディー川が、ゆるやかに湾曲する左岸に立地する。川に面して長辺約 1.2km の都城跡^{注1)} が確認され、さらにその都城を中心にして半径約 10km (とくに密集するのは半径約 5km) の範囲には、現存する大小 3800 以上^{注2)} のストゥーパや祠堂^{注3)}、僧房が高密度に群をなして立ち並ぶ。(密集域の面積を建築の数で単純に割れば、おおよそ 100m 歩くたびにストゥーパや祠堂に出くわすこととなる。実際に当地を訪れたことがある方ならば、堂塔建築が密に林立している感覚は理解いただけるだろう。)

なぜ、これほどの数の堂塔建築が建立されたのだろうか。これらのうち、半数以上は 11 ～ 13 世紀のバガン王朝期に建立されたものである。一時期に集中して、無数のストゥーパ・祠堂を建てる行為の社会背景として、王族による造営事業にとどまらず、ある程度の階級層による寄進行為が盛んであったことが推測されている。

以下は、伊東利勝氏による社会構成体の復原研究^{注4)} からの記述を抜き出したものである。

意識を物で表わす寄進行為は、ビルマ史の全体を通じてみられる。しかし Pagan 時代のそれは、規模と量において圧倒的であった。寄進によって功德を積むという行為は、仏教施設の造営と、三法に対する土地及び労働力の奉納に大別される。

造営事業に要する期間は、大規模なものでも、せいぜい一年程度であった。さらに、建造物の規模や碑文記録からみても一度に大量の労働力を必要とするものではなかった。従って、ある程度の富さえあれば、個人的事業として十分行いえた。

—伊東利勝「Pagan, Pinya, Ava 朝ビルマにおける社会構成の変化について」

数人で積むことができるレンガは、バガン王朝期建造物の主材料であり、紀元前 2 世紀頃から栄えたピュー王朝の時代から、独自のレンガ建築技術を発展させてきた^{注5)}。バガン王朝と同時期に栄えたアンコール王朝では、砂岩・ラテライトなどの石材が主材料であり、石切場から切り出して、水運などを用いて運搬して、積み上げて、という各過程で多大な労働力を要することからも、宗教建築の造営にみる生産体制や社会構成体は大きく異なるだろう。



図 1 Shwe Sandaw 寺院からみた都城周辺とエーヤワディー川の夕景

では、それぞれの都市構成はどうだろうか。バガンを鳥瞰的にみても、宗教建築群の配置は、確固たる計画なく、しかし互いに関係しあいながら、ゆるやかに群れを形成しているように見える。他方で、クメールの王都アンコールでは、中心寺院のバイヨン、アンコール・トム都城、さらにその周辺の寺院や構成要素は、整然とした配置計画のもとに形成されたように見受けられる。

そう感じさせる要因のひとつに「方位観」がある。アンコールの都城や建築の多くが東西南北の四方位を軸に、とくに、多くが東を指向するように計画されている（西向きのアンコール・ワット寺院などを除く）。一方で、バガンでは都城や周辺の大規模な堂塔建築の多くが、四方位を向くのではなく、それぞれ微妙に傾きをもっていて、一見すると、四方位とは関係なくバラバラに計画されているように見えるだろう（表 1 参照）。しかし、なぜ四方位を正確に向かず、傾きを有しているのか、この視点から論じた研究はない。

方位観を手がかりに、既往研究を参照しながら、バガン遺跡群の配置構成原理に接近するための道筋を整理したい。

2. ピューからバガンへ：都市構成の連続性と変遷過程

バガンを理解するためには、バガン期以前の都市構成を確認する必要がある。比較対象として、筆者らは「ピュー古代都市群」にて調査研究を行った。

本研究は、2019 年 1 月にマンダレイ、同年 12 月にバガンで開催した、メコン川流域国の研究機関による国際会議^{注6)}での筆者らの研究発表を深化させたものである。一連の国際会議では、1 月は「ピュー古代都市群 (Pyu Ancient Cities)」、12 月は「ピューからバガンへ (From Pyu to Bagan)」をテーマに、同遺跡群の専門家や各国の文化遺産研究者を招いて研究発表を行い、議論を交わした。その関連研究として、2018 年 2 月、2019 年 1 月、同年 12 月に、ピュー古代都市群およびバガン遺跡群を調査している。会議、調査のテーマ設定、とりまとめは中川武・早稲田大学名誉教授の主導のもとに行われた。

とくに、紀元前 2 世紀～後 9 世紀頃に存続したピュー古代都市群では、ハリン、ベイトノー、シュリクシェトラ、タガウン、マインモーの 5 都市にて、2019 年 1 月まで調査研究に取り組んできた。その結果は安井裕紀氏の修士論文^{注7)}にまとめられている。バガンやモン族の都市との比較から、多くの都市は四方位に沿って計画されず、傾きを有していることが指摘されている。

マインモー、チャイカッタ、タガラ以外は、どれも同様に西北へ 10～22 度ほど傾いていることがわかる。[中略] 特にハリン、ベイトノーの東側の都市壁、シュリ・クシェトラの王宮壁、ワディの王宮壁、バガンの都市壁は全ておよそ 9°～11°傾いた類似した方位軸を持つことが読み取れる。

—安井裕紀「ミャンマー・ピュー古代都市群の都市構造が示すピューの実像」

ピュー古代都市群において、マインモーを除く 4 都市は矩形に準じた周壁で構成され、その周壁が同程度の傾きを有することは注目に値する。さらに、その傾向はバガンも同様である。もちろん、都市の性格には違いがあり、例えば、ピューからバガンへの連続性を考古学的視点

(s) …stupa (mo) …monastery
(t) …temple (mh) …memorial hall
(r) …ritual structure

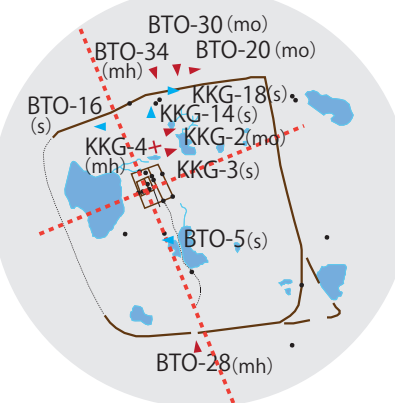
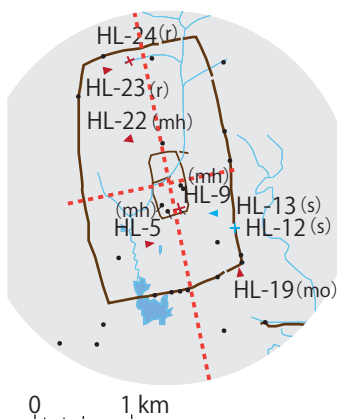


図 2 ピュー古代都市群における
主要な建築の方位とその傾き
(上が北。左からハリン、ベイトノー、シュリク
シェトラ。建物名はインベントリーに従う。赤
点線は都城壁の傾き。水色は四方位に沿う建築、
赤は傾きを有する建築。+は特定の方位に優位
性がない建築、▶は特定の方位に入口などの優
位性を有する建築、●は方位不明の建築。)

図 3 ハリンのストウパの
写真測量による平面図
(HL-13。上が北。
西側の周壁の一部が
ポーチ状である。)



からみる Bob Hudson 氏の研究^{注8)}では、ピュー古代都市群の多くが小さな支流沿いに立地するのに対し、バガンは大河エーヤワディーに接し、その性質は明らかに異なると言えること、また、ピュー古代都市群は広範囲を周壁で囲むのに対し、バガンの都城は小さく、王族等の権力の高い者しか都城内に居を構えることができなかったことを推測している。これらの性質の違いについては、ピュー時代の地域国家の連鎖からバガン期の統一国家への移行における変容として考慮する必要があるが、他方で、東西南北に対して正確に軸をとるのではなく、「民族方位^{注9)}」と捉え得るような、独自の方位観のもとに都城が構成されていることに論点を置きたい。

現地調査で、手測りや写真測量 (Agisoft PhotoScan を使用) などを重点的に行った、ハリン、ベイトノー、シュリクシェトラの建築が指向する方位についても、この都市全体の方位観に近しい傾向がうかがえる。

都市軸と類似した方位軸を持つ建物に着目したところ、ハリンでは Memorial hall にその傾向が見られ、石柱や木柱などの特徴的な痕跡が見られる祭祀関連の建物遺構 (HL-9,22) が特徴的であった。(中略) ベイトノーでは Monastery, Memorial hall で同様の傾向が見られ、(中略) シュリ・クシェトラでは Bawbawgyi や Mathigyagon などの Stupa で (同様の) 傾向が見られた。

一方で、都市軸とは一致せず正方位を示す建物遺構について着目すると、ハリンとベイトノーの Stupa でその傾向が見られ、いずれも同様の平面形式を有する小規模な Stupa 形式であることが分かった。(中略) その他の中～大規模な Stupa 形式はベイトノーとシュリ・クシェトラで見られ、いずれも傾きを持つ Stupa であった。

—安井裕紀「ミャンマー・ピュー古代都市群の都市構造が示すピューの実像」

①都城の傾きに類似する方位を指向するもの、②四方位に軸をとるものが、それぞれに存在していることが特筆すべき傾向である(図2)。また、この違いはストウーパ(stupa)や僧房(monastery)などの建物種と連関していることもわかるだろう。

さらに、筆者の考察をつけ加えるとすれば、以下のとおりである。(いずれも図2参照。)

- ・都城の傾きに類似する建築では、外周壁(都市壁)の外側の淵に立地するものの多くが、都城側に正面を向ける。(ハリン:HL-19、ベイタノー:BTO-28・30・34、シュリクシェトラ:HMA-10。)
- ・シュリクシェトラにおいて、傾きをもつ4つのストウーパの配置関係をみると、3つは外周壁(都市壁)の外側の淵、内周壁(王宮壁)の外側の淵に位置する。(前者:Bawbawgyi、Payagyi、Mathigyagon、後者:HMA-51。)
- また、傾きは不明であるが、Payamaも外周壁(都市壁)の外側の淵に位置する。
- ・筆者らが確認した建物のうち、四方位を軸とする建築に南を向くものが存在しない。
- ・ハリン・ベイタノーで四方位に軸をとるストウーパの多くが、一方向にポーチ状の周壁を有する(図3参照)。
- ・シュリクシェトラで四方位に軸をとるものの多くが祠堂(temple)である。(Bebe、West Zegu、HMA-3、HMA-31Dはtemple。)
- ・祠堂は、ハリン・ベイタノーでは確認されていない。

上記の点から考えると、建物種ごとの軸性の違いは、ハリン・ベイタノーと、シュリクシェトラ間で顕著である。まず、前者(ハリン・ベイタノー)ではポーチ付きの周壁を有するストウーパが四方位に沿うが、後者(シュリクシェトラ)ではその傾向は祠堂に強い。また、傾きをもつ建物のうち、周壁の淵の外側に位置し、かつ周壁側に正面を向けるものは、前者では僧房や「memorial hall」と称される1～2重の周壁とその内部に基壇を有する建物に多いが、後者ではストウーパに多いことがわかる。

ピュー古代都市群の建立時期は、出土物などから、ハリン・ベイタノーの各建物は2～5世紀頃、シュリクシェトラのストウーパは4～9世紀頃、祠堂は9～13世紀頃におおよそ位置付けられる^{注10)}。推測される年代の幅は広いが、シュリクシェトラの最盛期は他2都市より遅く、バガンに近い。前者と後者の違いは時代差である、と捉えるならば、建築・都市の発展過程を、以下のように見ることができよう。

まず、四方位を軸とする建築の形式について。ハリン・ベイタノーに見られる、ポーチ付きの周壁を有するストウーパでは、多くは残存状況が悪く、ポーチ部に入口があったかは不明である。しかし、ポーチが入口を意図していたと考えれば、シュリクシェトラ以降に見られる内部空間をもつ祠堂建築の発生によって、それが徐々に置き換わっていった可能性があげられる。事実、それ以降のバガン期には、ストウーパは基壇の上に置かれるのであって、周囲にポーチ付きの周壁を有さないのである。

次に、傾きをもつ建築の配置について。ハリン・ベイタノーでは、僧房など、内部に僧たちが入ることが想定される、道場的性質を有する建築が周壁の淵の外側に位置し、周壁の内側を

向いていたのに対し、シュリクシェトラでは、よりシンボリックに大規模化したストゥーパが、淵の外側に配されるように、都市構成が変化していくように見受けられる。これらの建築形式の変遷を追うことにより、それぞれの建築の意義や都市の性格を知る手がかりとなるだろう。

また、建物種によっては四方位に対して正確に軸をとる傾向があることから、ピュー時代には、四方位に対する観念はすでに生じていたと考えられる。一方で、都城の軸には四方位ではなく傾きがあること、それに沿うように計画される建物が見受けられることに、ピュー古代都市群の独自の方位観を、見るができる。ピュー時代後期に向けて、建築形式の発展にともなう都市構成の変化は、その後のバガンにも引き継がれていく傾向と比較しながら考察する必要がある。では次に、バガンでの建築群の方位性を見ていきたい。

3. バガンの主要な堂塔建築とその方位

バガン全体の都市構成とその計画原理の解明を試みた研究は多くない。ロシア人学者 U Kan Hla 氏は、それ以前の時代に比べて、バガン期では大規模かつ全高が高いストゥーパや祠堂が計画されることに対し、「少数の寺院が明らかに都市のパノラマを支配している」という発想を起点に、11 の大規模な寺院（表 1・図 4 参照）の配置計画分析を試みた^{注 11)}。その結果として、①寺院間の距離が基本単位で構成されている、②主要な寺院が 2 つの楕円弧に沿って並べられている、という基本原理を推察し、時代が下るとともに都市の構成がどのように変化していったのか、その計画手順を復原提案した。この研究は、都市構成を分析した初期的研究として意義深い、一方で、提案された計画手順は複雑で、2 つの楕円弧など、その原理の意味や背景も不明瞭である。

この論に対し、中谷礼仁氏の研究^{注 12)} では、U Kan Hla 氏が示した 11 の寺院を対象に、配置計画には中心となる点が存在することを推測し、王宮を中心に周囲に点在する 11 の寺院に線を伸ばしていくと、それらが規則的な角度で並んでいることから、王宮を中心とした大規模寺院の配置計画の概念があった可能性を指摘している。また、これはピュー時代（シュリクシェトラ）の、ストゥーパを周壁の外側に配置する性質を引き継いで、都市が構成されている可能性を指摘している。

それら〔注：初期に建立されたストゥーパのこと〕の配置計画は、バガンの基本的領域を知らせるといった目的にしたがっており、例えば、城壁の隅（Bu-paya）や川につき出した半島部（Lakananda）など、川上の船から見た場合、バガンの基本的領域が理解できる、地形的に特徴のある場所に建立されている。

この配置における方法は、ピュー族において長く伝えられていた手法であり、ピュー族の遺跡であるシュリ・クシェトラ（Sri Kshetra）に踏襲されている。

—中谷礼仁「バガンの変遷と宗教建築の配置計画について」

ピューからバガンへの都市の連なりは、こうした配置計画に確かに確認することができるだろう。では、方位についてはどうだろうか。U Kan Hla 氏は対象となっている 11 の大規模寺院の方位について、「11 世紀には方位は自由であった（Ananda は西、Nagayon と Shwesandaw は北）が、〔その後〕規則的に東に正面入口を向けるようになった。」（筆者和訳、〔 〕は加筆）と記

述している。これらはあくまで、11 の寺院内での時代傾向であり、また、それらの多くが正確に四方位を向くのではなく、バラバラと傾きを有していることについては考慮していない。

この点について確認したい。表 1 に、11 の寺院の方位とその傾きを示した。傾きは、Pierre Pichard 氏の「Inventory of Monuments at Pagan」Vol.1 ～ 8 の図面を用いている。このインベントリーの詳細については後述する。

Dhamma Yazika をのぞき、すべてのストウーパおよび祠堂が傾きを有していることがわかる。Dhamma Yazika についても、正面は東向きであると思われるが、バガンで特徴的に見られる五角形平面の寺院であり、四方位に対して正確に計画されていたのかは、建築形式の特質や方位観を検討する必要があるので、別稿に譲りたい。その他の寺院の指向する方位は、四方位（ストウーパを含む）：3 遺構、東向き：4 遺構、北向き：2 遺構、西向き：1 遺構である。ピューとの都市構成を比較してみると、周壁の淵の外側に位置する、Ananda Gu Hpayaya Gyi（西向き）と Shwe Hsan Daw（北向き）は、周壁の内側を向いている。それ以外の寺院では、Naga Yon Hpayaya（北向き）を除き、四方位か東向きであることがわかる。傾きの値にはバラつきがあり傾向は見られない。強いて言うならば、寺院が面する四方位から、時計回り（+）に傾きを有するものが 1 遺構であるのに対し、反時計回り（-）に傾きを有するものが 9 遺構ある。

これは、都城の傾きに準じているのではないか。筆者らは 2019 年 12 月に、王宮の発掘地にて簡易調査を実施した。その結果、王宮の周壁の傾きは、 -10° 程度であることがわかっていいる。一方で、 $-1^{\circ} \sim -23^{\circ}$ までの傾きのバラつきを、すべて都市の傾きに準じているとはいい難い。バガンにおける方位の傾向をより網羅的に分析するためには、主要な大規模のストウーパや祠堂だけでなく、小～中規模の建築群も含めて、分析を試みる必要がある。

4. バガンの寺院伽藍構成と方位の計画

Pierre Pichard 氏が著した「Inventory of Monuments at Pagan」をもとに、分析を進める。本書は、1982 ～ 1991 年の調査をもとに作成されたインベントリーで、Vol.1 ～ 8 にて言及された建物数は 2834 に及び、記録としての価値は高い。なお、このインベントリーを基礎に現地考古局が調査を進め、現在までに 3822 の建築を確認している。その内訳は、祠堂（temple）：1684、ストウーパ（stupa）：1032、僧房（monastery）：480、その他：142、未発掘（マウンド状）：484 の内訳となっている^{注2)}。

「Inventory of Monuments at Pagan」の 2834 の建物にはそれぞれ平面図や建築概要が記されている。そのうち、バガン期（11 ～ 13 世紀）に建立されたと推測されている 1858 棟の建物について、図面を元に方位と傾きを抽出したい。図面の精度はどの程度のものだろうか。平面図の描画方法について、インベントリー内では以下のように述べられている。

- ・方位の決定、および、ストウーパのように内部空間をもたないソリッド・タイプの平面図の描画は、ミャンマー政府測量局（Survey Department）から提供された縮尺 1:10,000 の航空写真を下地としている。

- ・祠堂や僧房のように内部空間をもつ平面図の描画は、主要部分の実測をもとにしている。

表 1 11 の大規模な寺院の方位

No.	建物名	建物種	年代	方位	傾き
1	Shwe Zigon	stupa	11c 第 4 四半期	NSEW	-20
748	Sula Mani Gu Hpaya	temple	1183	E	-5
771	Dhamma Yan Gyi	temple	1165	NSEW?	+10
947	Dhamma Yazika	temple/stupa (五角形)	1196-1198	E?	0?
1192	Naga Yon Hpaya	temple	11c 後半	N	-3
1439	Mingala Zedi	stupa	13c	NSEW	-6
1568	Shwe Hsan Daw	stupa	11c	N	-19
1597	That Byin Nyu	temple	12c	E	-4
1622	Gawdaw Palin	temple	12c 後半	E	-1
1812	Hti Lo Min Lo	temple	13c	E	-23
2171	Ananda Gu Hpaya Gyi	temple	12c 前半	W	-12

図 4 11 の大規模な寺院の配置関係
(番号は表 1 に対応。)



これらの図面は実測をもとにある程度の正確さをもっているものの、インベントリーの序文でも言及されているように「比較や分類を目的に作成した」ものであり、建築学的に寸法分析を手掛かりとして設計手順を復原するためには、今後の正確な実測調査が必要となる。一方で、全体の傾向をつかむことは可能であろう。これらの図面でどの程度の軸の傾きの差を、誤差として許容できるのか分析を行う。

バガンの各建物は 1 棟のみで単独で建っているものもあるが、多くは建築群をなしていたり、寺院伽藍を構成している。同書では、寺院名に Complex や Groupなどを付して、25 の群が確認される。3 つの群を事例に、同一伽藍内での軸の傾向と誤差の許容度を検討する。

4-1. Alopyi Group (表 2、図 5)

Alopyi Gu Hpaya (No. 374、寺院) と Sint Zedi (No. 377、ストゥーパ) が東西に並び、その周囲 (特に南北軸) に小規模のストゥーパや祠堂、僧房が並ぶ。Alopyi Gu Hpaya と Sint Zedi を囲む東側周壁と、祠堂、小規模のストゥーパいくつかを囲む西側周壁から構成される。ストゥーパを除くすべての建物が東を指向する。多くは東 (ストゥーパの場合、四方位) に正確に軸をとるが、1 棟は -2° (No. 379)、2 棟は -3° (No. 387、388) の傾きを有している。傾きを有する建物は、いずれもストゥーパであり、独立基壇にのっている。基壇部で方位を計測していると思われるが、周囲の建物に並列して計画されているように見受けられるため、傾きを有する建物も、おそらく四方位に正確に軸をとるよう計画されていたことが想定される。

4-2. Hsutaung Pyi Monastic Complex (表 3、図 6)

Hsutaung Pyi Zedi (No. 906、ストゥーパ) と形式の異なる僧房 2 棟 (No. 907、908)、「ordinatino hall」(No. 909) からなる第一周壁、その外側に小規模の僧房が数棟並ぶ第二周壁を有している。ストゥーパを除き、その多くが東を指向する。第一周壁では $0^{\circ} \sim -3^{\circ}$ の傾きであり、正確に東を向くように計画された可能性が想定される。第二周壁の僧房は $0^{\circ} \sim -4^{\circ}$ の傾きである。いずれも小規模であり、これらも正確に東向きの計画であった可能性があげられるだろう。第二周壁の外側には、さらに複数の伽藍が東西に並ぶが、これらの周壁や内部の祠堂などの建築は傾きをもっているように見受けられる。

4-3. Mingala Zedi Group (表 4、図 7)

第一周壁の中央にピラミッド状の基壇をもつ大規模なストウーパ Mingala Zedi (No. 1439) があり、複数棟の僧房、祠堂、小規模のストウーパが取り囲む。第一周壁外には、それ以上の周壁は存在せず、小規模なストウーパや祠堂、僧房が、それぞれ数棟ずつ、とくに南北軸に列をなす。第一周壁内の北東隅にある No. 1440 が西向き、第一周壁の北門外にある No. 1422 が北向き、方位が不明なものもあるが、多くは東を指向する。中央の Mingala Zedi が -6° の傾きを有し、第一周壁内のいくつかの建物はその傾きに従う。No. 1440、1441、1442 の 3 棟はインベントリーの図面判例に傾きが記入されていないが、航空写真や配置図では、傾きを有しているように見受けられるため、図面の表記誤りだと思われる。

周壁外に点在する建物は、同角度に従うものと、そうでないものが存在する。例えば、第一周壁外の南東側にある 3 棟の僧房 (No. 1424 ~ 1426) は、Mingala Zedi に近い傾きを有する。一方で、第一周壁の北門外の 2 棟のストウーパ (No. 1420、1421) は南北軸沿いに並列するが、いずれも傾きを有していない。また、第一周壁外の北東側にある 2 棟の祠堂 (No. 1416、1417) は南北軸沿いに並列するが、傾きはそれぞれ $+4^{\circ}$ 、 $+2^{\circ}$ で、東向きである。これらは正確に四方位を軸として計画されていた可能性がある。

上記の 3 事例から、寺院伽藍の周壁内にある建築群は、同角度で計画されている傾向にあると言えるだろう。一方で、周壁の外に点在する建物は、寺院伽藍の傾きに従うものと、異なる軸で計画されているものがあるようだ。また、3 事例からの検討結果ではあるが、 $3 \sim 4^{\circ}$ の傾きの相違は誤差として許容できると考える。

検討した事例では、多くの建物が東を指向している。その他の方位に優位性をもつものは少ない。また、四方位に対して正確に軸をとるものと、傾きを有するもののに大別される傾向は、ピュー時代から引き続き確認できると言えるだろう。対象をバガン全体の建物に広げて、方位の優位性と軸の傾きの傾向について、統計的に分析する。

5. バガンの建物全体にみる方位の優位性と傾き

「Inventory of Monuments at Pagan」掲載の、バガン期 (11 ~ 13 世紀) の建物 1858 棟のうち、1596 棟で優位性をもつ方位やその傾きを確認することができた。残りの 262 棟は、崩壊が激しく不明瞭であるか、円形基壇のみで構成されており、特定の方位への優位性や傾きが確認できなかったものである。また、方形基壇を有するストウーパや四方に入口を有する祠堂など、建築形式から特定の方位への優位性を現段階で確認できていない場合は、東西南北に等位であると仮定している。

まず、方位の優位性について確認する。表 5 は、建物種ごとに、正面を向ける方位を確認したものである。四方に等位の建築を除くと、東を向く建築の数が全体の約 7 割、ついで北、西、南の順である。とくに、南を向くものは圧倒的に少なく 17 棟しか確認されていない。建物種は、祠堂 (816 棟)、ストウーパ (488 棟)、僧房 (249 棟) の順に数が多いが、方位観の差異は見られない。いずれも東、北、西、南の順に多い。

表 2 Alopyi Group の建物と方位

No.	建物名	建物種	年代	方位	傾き
374	Alopyi Gu Hpaya	temple	12c (1130?)	E	0
375	-	monastery/ruined	13c?	?	0
376	-	monastery	13c	E	0
377	Sint Zedi	stupa	12c	NSEW	0
378	-	temple	13c	E	0?
379	-	stupa	13c	NSEW	-2
380	-	stupa/ruined	13c	NSEW	0?
381	-	temple/ruined	13c?	?	0?
382	-	temple	13c	E	0
383	-	stupa	13c	NSEW	0
384	-	stupa	13c?	NSEW	0
385	-	stupa	13c?	NSEW	0?
386	-	temple	13c	E	0
387	-	stupa	13c	NSEW	-3
388	-	stupa	13c	NSEW	-3

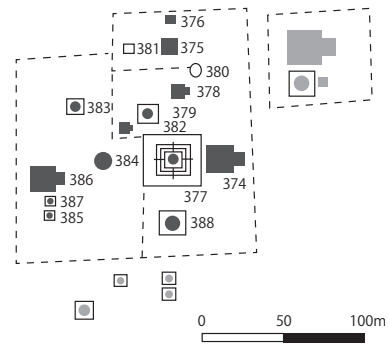


図 5 Alopyi Group 配置図 (図面上が北。)

表 3 Hsutaung Pyi Monastic Complex の建物と方位

No.	建物名	建物種	年代	方位	傾き
906	Hsutaung Pyi Zedi	stupa	1230?	NSEW	0
907	-	monastery	13c	E	-3
908	-	monastery	13c	E?W?	-2
909	(ordination hall)	ordination hall	13c	?	-3
910	-	monastery	13c	E	-1
911	-	monastery	13c	E	-2
912	-	monastery	13c	E	0
913	-	monastery	13c	E	0
914	-	monastery	13c	E	-4
915	Min Ma Ye Hpaya	temple	13c	E	-1

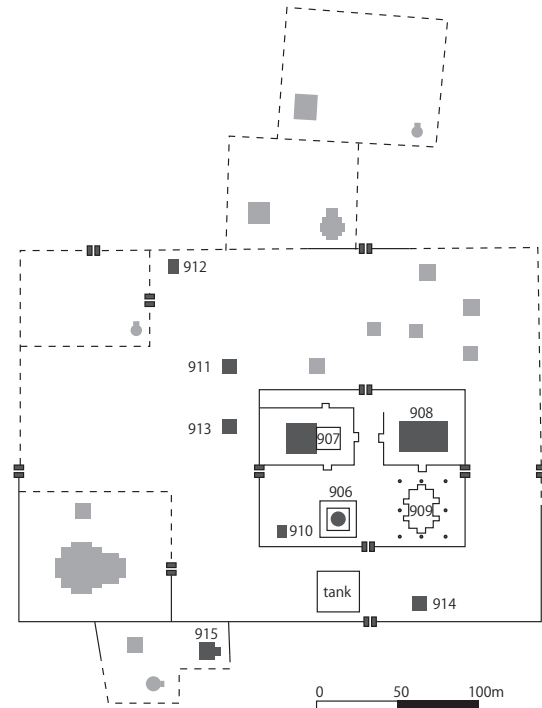


図 6 Hsutaung Pyi Monastic Complex 配置図 (図面上が北。)

表 4 Mingala Zedi Group の建物と方位

No.	建物名	建物種	年代	方位	傾き
1354	-	monastery	13c	E	-5
1410	Nga Myet Hna	temple	13c	?	-5?
1411	-	stupa	13c	NSEW	-4
1412	-	stupa	13c	NSEW	-6
1415	-	monastery	13c	E	-10
1416	-	temple	13c	E	+4
1417	-	temple	13c	E	+2
1418	-	monastery	13c?	E	0
1419	-	stupa	13c	NSEW	?
1420	-	stupa	13c	NSEW	0
1421	-	stupa	13c	NSEW	0
1422	-	temple	13c	N	-5
1423	-	mound	13c?	?	?
1424	-	monastery	13c	E?	-5
1425	-	monastery	13c	N?	-4
1426	-	monastery/mound	13c?	?	-5
1427	-	monastery	13c	E	-5
1433	-	monastery	13c	E	-5
1434	-	monastery	13c	E	-6
1435	-	mound	13c?	?	?
1436	-	mound	13c?	?	?
1437	-	stupa	13c	NSEW	0?
1438	-	stupa	13c	NSEW	?
1439	Mingala Zedi	stupa	13c	NSEW	-6
1440	-	temple	13c	W	0?
1441	-	stupa	13c	NSEW	0?
1442	-	monastery	13c	E	0?
1444	-	monastery	13c 後半	E	-8
1445	-	monastery	13c	E	-11
1446	-	temple/mound	13c?	E?	?
1447	-	mound	13c?	?	?

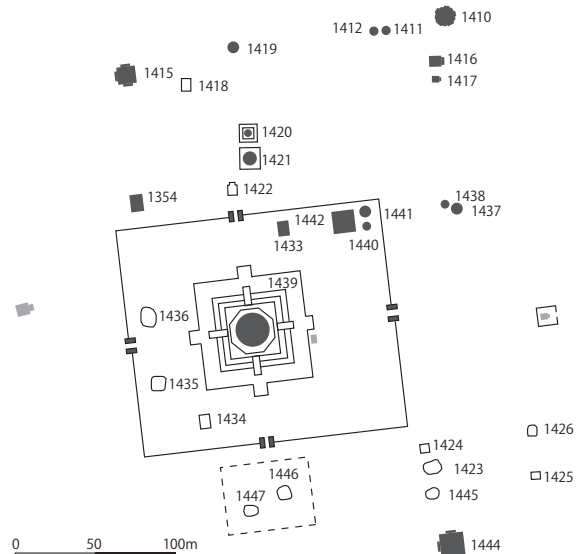


図 7 Mingala Zedi Group 配置図 (図面上が北。)

方位の優位性について、溝口明則氏の古代インドの方位観に関する研究^{注13)}を参照して考察する。溝口氏の研究では、初期仏典の表現の分析から、東－西を一对、南－北を一对と認識し、それぞれは、東>西、北>南の優位性をもっていたことが指摘されている。この観点でバガンの方位優位性の傾向を見てみれば、古代インドと同様に、東>西、北>南の優位性が存在していたと考えられ、特に南を避けていたことが言えるだろう。南については、古代インドの経典『大般涅槃經』や『マヌ法典』に確認されるように、死を表す否定的な方位だったとされる。

次に軸の傾きの有無を確認する。四方位に正確に軸をとる建築はどの程度あったのだろうか。前述のとおり、3～4°の傾きの相違は誤差として許容できるだろう。今回は±3°を許容範囲に設定し、建物種ごとに確認した(表6)。その結果、祠堂は223棟、ストゥーパは141棟、僧房は77棟と、各建物種総数の4分の1程度ずつが四方位に正確に向いており、その割合は建物種ごとに大差ない。ピュー時代は、四方位に軸をとるものと、都城の傾きに沿うものとは、建物種ごとに傾向の違いが明瞭であったが、この性質はバガン期には引き継がれていないようだ。バガン期では、前節で紹介したような寺院伽藍に、祠堂やストゥーパ、僧房などの各要素が複合化していったことに、その性質の違いがあるように見受けられる。

最後に、傾きの値の傾向を図8に示す。傾きをもたない、四方位を正確に向く、0°の建築数が最も多く、そこから山なりに減っていくように見えるが、特筆すべきは、時計回り(+)に比べ、反時計回り(－)に傾くものが明らかに多いことである。必ずしも都城の傾き(－10°程度)と同様の値が多い訳ではないが、四方位ではなく、都城と同様の方位に、傾きをもった軸で建築群が計画されていることは、ピューからバガンへの連続性と言えるだろう。

6. 考察と展望

本研究では、ピュー時代の都市・建築と方位観の変容過程を明らかにし、さらにその性質がバガンに引き継がれている可能性を指摘した。主に、以下の2点の可能性を「バガン遺跡群の方位観」としてあげておきたい。

- ・確固たる寺院伽藍を構成せずに、独立建物が点在していたピューの都市に対して、伽藍や群としての寺院の配置計画が具現化していったバガンでは、寺院伽藍の配置計画や建築形式を変容させながらも、前時代の方位観を継承していった。

- ・バガンの建築群に確認される方位の優位性に、古代インドの方位観の受容が指摘できる一方で、傾きを有する建築群の計画に、前時代から継承された方位観を見ることができるならば、古代インドの仏教伝来以前からの独自の「民族方位」の存在が推測される。

バガンにおいて、前時代からの方位観をどのように受容し、変容させていったのかは、今後の考察が必要である。寺院伽藍や建築群の配置計画と、時代変遷を分析していきたい。

一方で、その変容過程の分析を難しくしているのが、序盤で述べた精力的な寄進行為である。寄進行為は、新築の堂塔造営に限定されず、既存建物に対しても盛んであった。例えば、Kyauk Mye Mo Zedi Gyi(図9)では、崩壊したストゥーパの内部に、異なる様式のストゥーパが覗いている。このような、ストゥーパのまわりにレンガを積み、まるまる覆ってしまうよう

表 5 建物種と方位の傾向

	東	西	南	北	計
stupa	435	12	0	6	454
stupa (マウンド、崩壊が激しいものなど)	30	2	2	0	34
temple	46	448	171	120	790
temple (マウンド、崩壊が激しいものなど)	3	12	6	3	26
temple+stupa	0	3	0	1	4
monastery	0	215	21	6	249
other	6	20	6	5	39
計	522	712	205	140	1596

表 6 四方位に軸をとる建物種と方位の傾向

	東	西	南	北	計
stupa	130	7	0	4	141
temple	15	119	61	27	223
temple+stupa	0	1	0	0	1
monastery	0	75	0	1	77
stupa+monastery	0	1	0	0	1
other	2	6	3	3	16
計	147	209	64	35	459

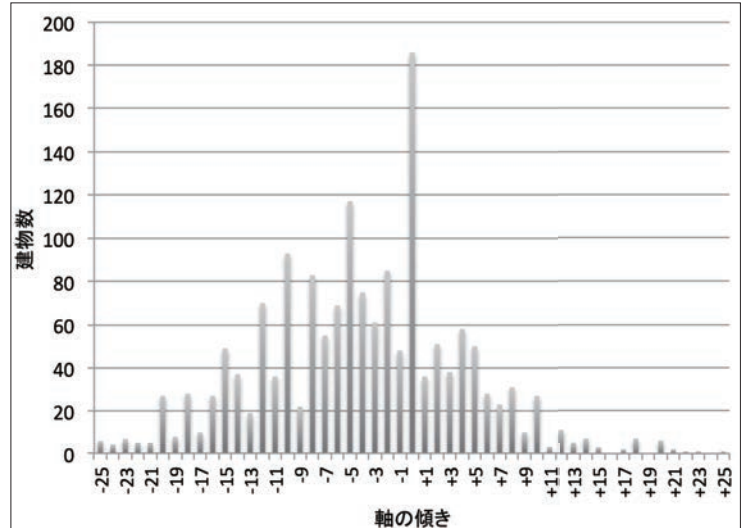


図 8 軸の傾きの傾向
(建物が指向する方位から、時計回りに傾くものを+、反時計回りに傾くものを-で、角度を示している。)



図 9 ストウパを内包するストウパ。
大型のストウパの崩壊部から、内部に異なる様式のストウパを包含していることを確認できる。
(No. 1158 : Kyauk Mye Mo Zedi Gyi)

な増築行為は、バガンでは 30 例ほど確認されている。中には、隣接する 2 つのストウパを内包した、大規模なストウパも確認されている。バガン期の 85% の建物が、13 世紀のものと推測されているが、この増築行為に確認されるように、必ずしも表面の建築だけで計画年代を判断できないことは、都市や寺院伽藍の構成の変遷を見る上で考慮する必要があるだろう。

また、古代ミャンマー独自の方位観を明らかとするためには、周辺環境や地勢に対する民族意識、社会構成体、仏教伝来以前の信仰などへの理解が不可欠だ。ひとつの手がかりとして、仏教伝来以前から根強く信仰されてきた、アニミズムの「ナツ (Nat) 信仰」をあげる。バガン王朝初代のアノーヤター王は、国教をテラヴァダ仏教とする一方で、民間に根強いナツ信仰を習合するため、ナツ信仰の 36 神格に、仏教の守護者としての役割をもつ Sakra (帝釈天) を付け加えた、37 神を体系化し、仏教と共存させたと言われている^{注 14)}。

ピュー時代の地域国家の連鎖から、バガン王朝にてはじめて統一国家と化したときの、宗教や社会体制の変容過程から、ピューからバガンへの連続性と、バガン遺跡群の方位観を考えていきたい。

< 図版出展 >

図 1…筆者撮影 (2015 年 1 月)。現在は遺跡保護のため、Shwe Sandaw 寺院をはじめ多くの遺跡で建物上層部への立ち入りが禁止されている。

図 2…安井 (2019) にて作成の地図をもとに筆者加筆。

図 3…現地調査時に、写真測量 (Agisoft Photoscan) を実施して作成。

図 4…Google Eath をもとに筆者加筆。 (©Google Earth 2020 CNES / Airbus)

図 5 ～図 7…Pierre Pichard 著「Inventory of Monuments at Pagan」 vol. 1 ～ 8 を元に筆者作成。

図 8…筆者作成。

図 9…筆者撮影 (2019 年 12 月)。

< 注釈 >

注 1…現存する都城壁は北・南・東の 3 辺のみだが、当初は西面にも城壁がまわっており、バガン期もしくはそれ以降の川の流れの変化によって消失したとされる。出展：Daw Thin Kyi, 'The Old City of Pagan'. Essays offered to G. H. Luce, "Artibus Asiae". Volume 23, pp.179-188, 1966.

注 2…文化庁・早稲田大学文化財総合調査研究所主催シンポジウム「メコンがつなぐ文化多様性ー東南アジア文化遺産研究の現在ー」における Soe Soe Lin 氏の発表「Cultural Heritage Sites in Myanmar」による (2020 年 1 月 23 日)。

注 3…バガンの内部空間をもつ建物の多くに仏像が設置されており「仏堂」と称する既往研究もあるが、バガン期以前や東南アジアの諸地域との建築形式を踏まえ、共通して「祠堂」と称する。これは千原大五郎氏の呼称に倣っている。(千原大五郎「東南アジアのヒンドゥー・仏教建築」鹿島出版会, 1982, pp.41 ～ 44.)

注 4…伊東利勝「Pagan, Pinya, Ava 朝ビルマにおける社会構成の変化について」『成城大学経済研究』55/56 号, pp.337 ～ 362, 1976 年 12 月。

注 5…主要なものとして、以下をあげる。U Aung Myint, Elizabeth Moore, 'Finger-Marked Designs On Ancient Bricks In Myanmar', School for Oriental and African Studies University Of London, 1991.

注 6…日本学術振興会の研究拠点形成事業 (B. アジア・アフリカ学術基盤形成型、代表：小岩正樹) として、早稲田大学およびミャンマーの Mandalay Technological University, Technological University of Maandalay による共同開催。2013 年からメコン川流域国における文化遺産の保存活用のためのネットワーク形成を目的に同国際会議を各国で開催している。関連する現地調査は Silpakorn University と共同で実施した。共同調査の成果は、Collaborative Survey Report として、セミナーにて発表した。

注 7…安井裕紀「ミャンマー・ピュー古代都市群の都市構造が示すピューの実像」早稲田大学修士論文, 2019 年。

注 8…Bob Hudson, 'The Origin of Bagan: The archaeological landscape of Upper Burma to AD 1300', University of Sydney, 2004.

注 9…本研究で扱う「民族方位」は、「四方位 (東西南北)」の観念が導入される以前からの、民族間で共有されていた地理的認識に基づく方位観であるとする。溝口明則氏によれば「紀元前三〇〇年以後から紀元前後に至る過程でインドの四方位の観念が確立した (中略) 古代インドの原初の方位観も、部族共同体それぞれを巡る環境によって多様な民族方位が存在していたであろう。」とのことから、古代インドからの仏教伝来以前から、古代ミャンマーの地域国家で共有されていた方位観が存在していたと仮定している。(注 13 を参照。)

注 10…現地考古局作成の各都市のインベントリーによる (現地にて入手)。

注 11…U Kan Hla, 'Pagan : Development & Town Planning', "Journal of the Society of Architectural Historians", 36(1), pp.15-29, 1977.

注 12…中谷礼仁「バガンの変遷と宗教建築の配置計画について」早稲田大学卒業論文, 1987 年。

注 13…溝口明則「古代建築 先制王権と世界宗教の時代」(中川武 編『世界 宗教 建築史シリーズ』) 丸善出版, 2018 年 10 月。

注 14…ミャンマーの歴史家 Maung Htin Aung 氏の紹介を参照。Maung Htin Aung, 'Folk-Elements in Burmese Buddhism: Alchemy, spirits, and ancient rituals', "The Atlantic", 1958.02. (Web アーカイブにて確認 : <https://www.theatlantic.com/magazine/archive/1958/02/folk-elements-in-burmese-buddhism/306833/>)

後記・執筆者略歴

Postscript

* * * * *

★2年ほど費やしてきたピューとバガンでの調査研究を、ようやくいったんまとめる機会となりました。タイ・Silpakorn University、ミャンマー・Technological University Mandalay や現地考古局との共同研究を継続して、成果を東南アジアにて発表できるように、分析を続けていく所存です。

黒岩千尋

1991 年生まれ / 2014 年早稲田大学創造理工学部建築学科卒 / 2016 年同大学院創造理工学研究科修了 /
2019 年同大学大学院博士後期課程単位取得退学 / 同年より同大学理工学術院総合研究所研究員 /
主な論文：Khmer 地方拠点研究 - āçrama と建築・図像変化における帝国の構造 - /
編集事務所勤務

★今回の投稿は修士論文の一部分から抽出したものです。興味深いものとの出会いは、駒隙人生で至福の瞬間と思います。研究にも日本語にも未熟者でございますが、研究室の皆様から親切な助言をいただき、感謝しております。今後とも変わらぬご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

常塚 (略歴は第 62 号に掲載)

★今回初めて史標に投稿させていただきます。資料調査内容を執筆させて頂きました。ベルリンの旧国会議事堂に関する資料でしたが、その建築にはドイツ帝国の政治が大きく関わっており、考えるべき点が多々ありました。しかし、そこから自分の知識の浅はかさや、建築の奥深さを再認識し、今後の学ぶ意欲が掻き立てられました。

河合七海

1997 年生まれ / 2019 年早稲田大学創造理工学部建築学科卒 /
主な論文：人と木工具の相互関係 - ドイツの木工具の形成と発展を通して -

★貴重書庫には多くのガラス乾板の原版があり、箱の裏書きには撮影対象の名称が書かれたものが多く、スキャンデータとともに対象の特定と整理の必要性を感じました。日本だけではなく海外の遺跡、明治大正期の資料の写真といった多くの写真を見る事ができ、また保存図をはじめとした様々な貴重資料に触れることができた資料調査は貴重な経験となりました。

内田鞠乃

1997 年生まれ / 2019 年早稲田大学創造理工学部建築学科卒 /
主な論文：建造物保存修復における技術の継承 - 建造物彩色技術と日光社寺文化財保存会の歴史・活動を通して -

★書誌情報とあわせ、長野宇平治について調べると、彼の日本銀行本店増築における設計は、辰野金吾への継承設計としての価値、保存行為としての調査の記録などが今日の「保存」をめぐる問題に対して先見の明をもっていたことが明らかにされていました。長野の蔵書にはそのような行動に至る考えのもととなるものがあるのではないのかと感じています。引き続き修士論文でこの資料を扱おうと考えています。

高瀬道乃

1996 年生まれ / 2019 年早稲田大学創造理工学部建築学科卒 /
2019 年同大学院創造理工学研究科建築学専攻在籍 /
主な論文：現代社会における「芸術」のあり方 - ルネサンス期の社会学的分析手法を通して -

お知らせ
Submission

○「史標」原稿募集規定

本誌への投稿を歓迎いたします。論文、報告、書評、人物紹介、随筆等、内容は自由。建築学以外の論考に關しても可。以下の連絡先までご連絡いただければ、フォーマットテンプレートをお送りいたします。原則として、偶数ページにおさめることとし、図版には典拠、キャプションを付加してください。また、執筆後期 (210 文字以内)、略歴 (124 文字以内) のご送付もお願いいたします。

○質疑・討論原稿募集規定

掲載原稿に対する質疑や、討論の申し込みも受け付けております。ページ数は自由で、その他の原稿の形式に関しては上記のものと同一で構いません。提出期限は随時。多数のご質問・ご批評をお待ちしております。

○お問い合わせ

〒 169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1
早稲田大学西早稲田キャンパス 55N 号館 8 階 10 号室
建築史研究室内 O. D. A.「史標」出版局
TEL: 03-5286-3275
FAX: 03-3204-5486
Mail Address: shihyo@lah-waseda.jp

「史標」第 66 号

2020 年 3 月号 (2020 年 3 月 31 日発行)

編集：河合七海、森田歩

〒 169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1
早稲田大学西早稲田キャンパス 55N 号館 8 階 10 号室
建築史研究室内 O. D. A.「史標」出版局
TEL: 03-5286-3275
FAX: 03-3204-5486
Mail Address: shihyo@lah-waseda.jp

「史標」第 66 号（2020 年 3 月号） O. D. A.「史標」出版局発行